第３章　比内地区の調査

１　長岡城跡（私道建設工事）

(1)　遺跡の位置と周辺の環境

長岡城跡は、米代川支流の犀川下流域右岸に所在する。本城跡は、浅利氏に関わる戦国時代の城跡である。遺跡の位置は、北緯 40 度 13 分 12 秒、東経 140 度 35 分 1 秒（世界測地系）である。標高は、最も高い中央側で 73m、北西側で 68mである。

遺跡の南側には、真館Ⅱ遺跡と真館Ⅲ遺跡、低地を挟んだ東側に、縄文時代前期と平安時代の遺跡である大岱遺跡が所在する。

(2)　調査の内容

テストピットおよびトレンチは、基本的に１m幅とし、路線が計画されている範囲内を主に対象として、任意で設定した。テストピットおよびトレンチの掘削は全て人力で行い、基盤層に相当する黄褐色粘土層（Ⅳ層）まで掘り下げ、遺構の記録・遺物の収集等を行った。

調査地内の基本層序は、基盤をなす黄褐色粘土層の上に腐植土層が堆積する単純なものである。

Ⅰ層　表土。

Ⅱ層　黒色～黒褐色を呈する腐植土層で、本来の遺物包含層である。本層は、色調からａ～ｃ層に細分される。

Ⅱａ層　黒色を呈する土層。

Ⅱｂ層　黒色を呈する土層。Ⅱａ層より若干暗い。

Ⅱｃ層　黒褐色を呈する土層。

Ⅲ層　黒褐色～暗褐色を呈する土層。Ⅱ層とⅣ層の漸移層である。

Ⅳ層　黄褐色を呈する粘土層。

Ⅴ層　オリーブ褐色を呈する砂層。

今回の調査により、溝跡２条（ＳＤ１・２）、土坑１基（ＳＫ）、柱穴様ピット６基（ＳＰ）を発見し、縄文土器３点、続縄文土器２点、近世～近代の陶磁器 42 点、土器（貝風炉）２点、石製品１点、礫５点を得た。

(3)　遺構

溝跡１・２

位置　ＴＲ25 に位置する。北西－南東方向に直線にトレンチの範囲外にのびる。

遺構　底面は平坦である。幅は確認面で溝跡１が 1.15～1.4m、溝跡２が 0.88～１m、深さは溝跡１が 80 ㎝前後、溝跡２が 40 ㎝前後である。いずれも東側の壁の立ち上がりは明瞭であったが、西側は地形が低いためにやや不明瞭であった。遺物は出土しなかった。周辺を精査したところ、ＳＤ１内に小ピット２基、西側に小ピット１基が確認された。本溝跡の一部など施設の可能性が考えら

図 86　調査区と周辺の地形 (1:2,500)

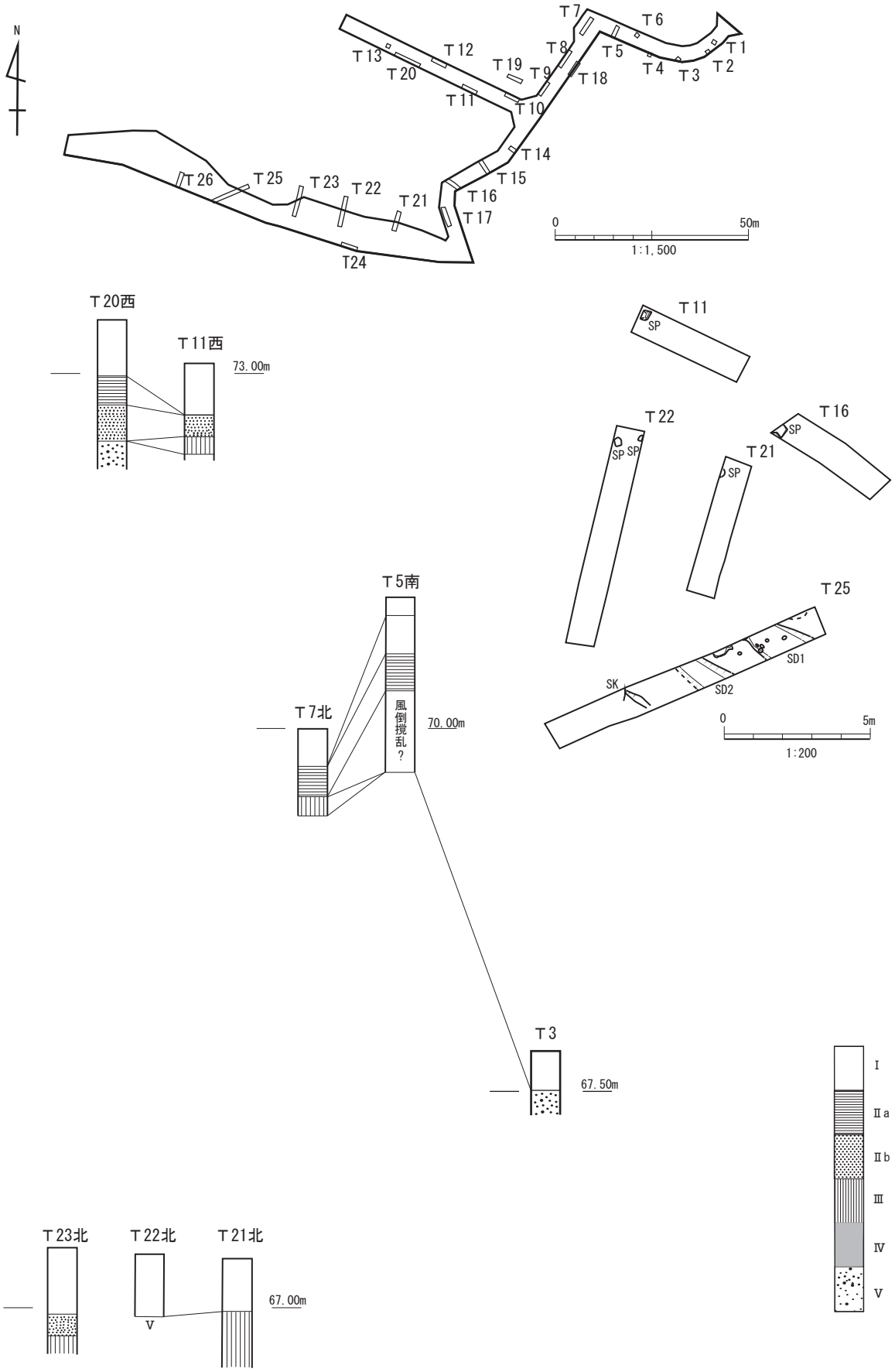


図 87　調査位置と検出遺構図

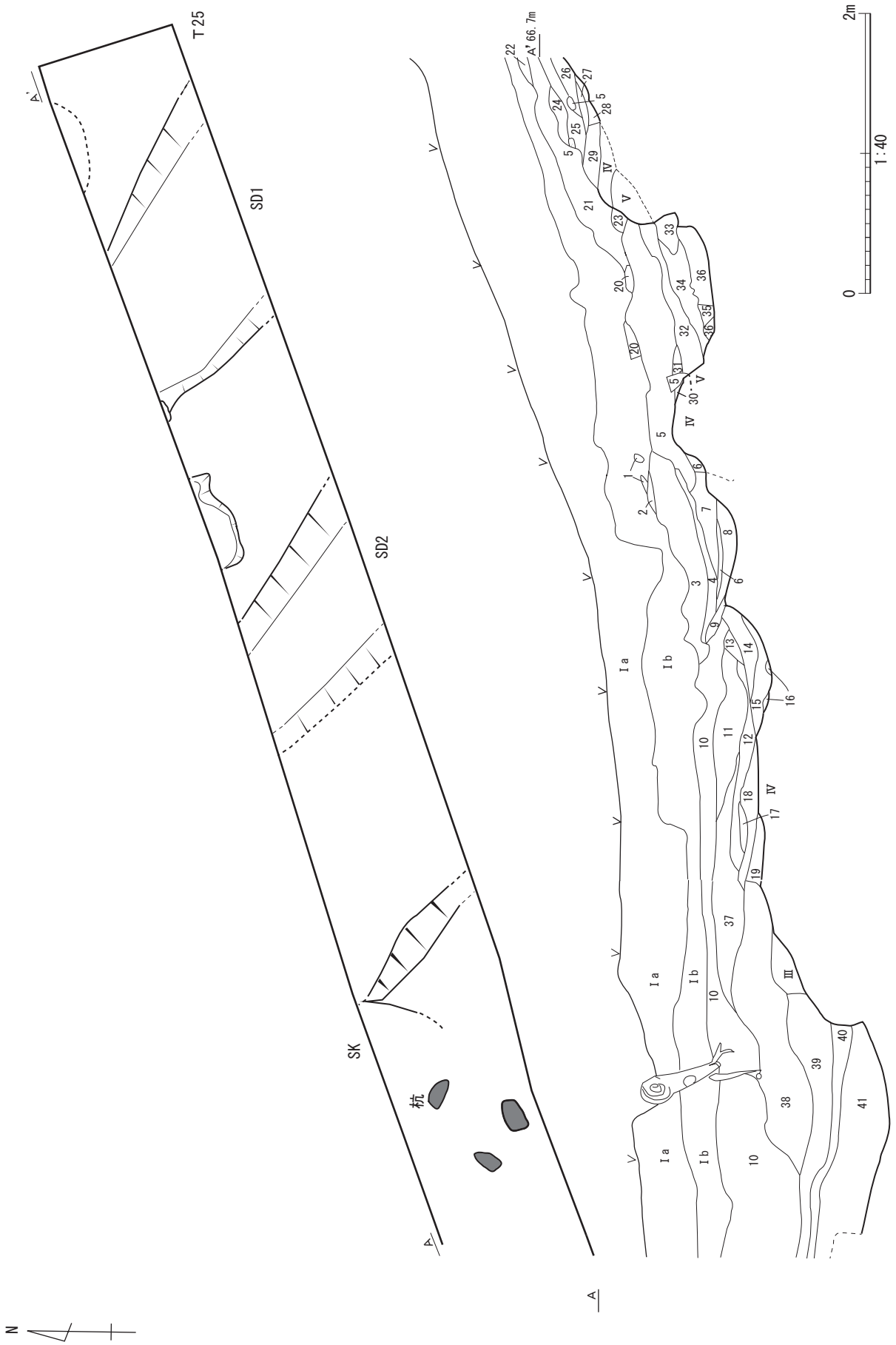


図 88　溝跡１・２

Ⅰa	10YR2/1黒色	固く締まる。粘性弱。表土。
Ⅰb	10YR2/2黒褐色	締まり有り。粘性弱。江戸期以降の盛土。
Ⅲ	10YR3/4暗褐色	固く締まる。粘性なし。
Ⅳ	10YR5/6黄褐色	締まりよし。粘性なし。
Ⅴ	2.5Y5/2暗灰黄色と10YR5/6黄褐色砂	締まり弱。粘性なし。

1	10YR1.7/1黒色	Ⅳブロック混入。締まり有り。粘性弱。
2	10YR2/3黒褐色	締まりなし。粘性弱。
3	10YR1.7/1黒色	締まり、粘性有り。
4	7.5YR4/4褐色	締まり有り。粘性なし。
5	10YR2/2黒褐色	締まり有り。粘性弱。
6	10YR5/6黄褐色	締まり、粘性なし。
7	10YR2/3黒褐色	砂質。締まり有り。粘性弱。
8	10YR2/3黒褐色	砂質。締まり有り。粘性弱。
9	10YR5/6黄褐色	Ⅳ＋Ⅴ。締まり有り。粘性なし。
10	10YR2/1黒色	Ⅱ。締まり有り。粘性弱。
11	10YR2/1黒色	Ⅱ、Ⅳ少量混入。締まり、粘性有り。10よりやや明るい。
12	10YR2/1黒色	砂質。締まり有り。粘性弱。
13	10YR1.7/1黒色	砂質。締まり有り。粘性弱。
14	10YR2/1黒色	砂質。締まりよし。粘性弱。
15	10YR1.7/1黒色	締まり、粘性有り。湿っている。
16	10YR5/6黄褐色	Ⅳ＞Ⅱ。締まり有り。粘性なし。
17	10YR2/1黒色	締まり、粘性有り。15に類似。
18	10YR4/4褐色	Ⅳ＞Ⅱ。締まり有り。粘性なし。16に類似。
19	10YR3/3暗褐色	粘土質。締まりよし。粘性有り。
20	10YR4/3にぶい黄褐色	Ⅳ主体。締まりやや有り。粘性なし。
21	10YR2/2黒褐色	砂質。柔らかい。粘性なし。
22	10YR2/2黒褐色	砂質。パミス（φ2～3mm）少量混入。締まり有り。粘性なし。
23	10YR3/3暗褐色	砂質。Ⅳ＞Ⅰ。締まり、粘性なし。
24	10YR2/3黒褐色	砂質。締まり、粘性なし。
25	10YR2/2黒褐色	砂質。柔らかい。粘性なし。
26	10YR3/3暗褐色	砂質。Ⅳ粒少量混入。締まりよし。粘性なし。
27	10YR2/2黒褐色	砂。締まり、粘性なし。
28	10YR3/3暗褐色	砂。締まり、粘性なし。
29	10YR5/4にぶい黄褐色	砂。Ⅳ主体。締まりよし。粘性なし。
30	10YR2/3黒褐色	砂。柔らかい。粘性なし。
31	10YR2/2黒褐色	砂。柔らかい。粘性なし。
32	10YR2/1黒色	砂。Ⅳ＞Ⅱ。締まり、粘性なし。
33	10YR3/4暗褐色	砂。Ⅳ粒多量混入。締まり、粘性なし。
34	10YR1.7/1黒色	砂質。Ⅱ。締まりなし。粘性弱。
35	10YR2/3黒褐色	砂質。締まりなし。粘性弱。
36	10YR5/6黄褐色	Ⅳ。砂。下層に薄く黒色土が堆積。締まり、粘性なし。
37	10YR2/3黒褐色	Ⅳ＞Ⅲ。柔らかい。粘性弱。埋め土。
38	10YR2/1黒色	締まり有り。粘性弱。
39	10YR2/1黒色	柔らかい。粘性強。
40	10YR1.7/1黒色	柔らかい。粘性強。
41	10YR2/1黒色	砂質。柔らかい。粘性弱。

れる。ＳＤ１・２の東隣にはそれぞれ浅い掘り込みがあり、溝が改築された可能性がある。また、土塁は確認されなかった。ＳＤ１・２の西側にさらに溝が存在していた可能性があるが、土坑によって壊されており、今回の調査では明らかにできなかった。なお、土坑の詳細については湧水のため、十分な調査ができなかったが、杭や横木などの木材が良好に遺存しており、江戸時代以降に造られた井戸跡と考えられる。

(4)　遺物

トレンチから、縄文土器片３点、続縄文土器２点、中世～近世の陶磁器 27 点、近世の瓦質土器（土風炉？）１点、石器１点、礫３点など、計 48 点の遺物が出土した。その大半は表土中から出土したものである。しかしながら、出土遺物の分布状況には一定の偏りが認められる。

本来の遺物包含層であるⅡ層はＴＲ20 以西の地域に比較的良く残存していることから、Ⅱ層出土の遺物はこの区域に集中する傾向をみせる。また、全出土量の大半を占めるⅠ層の出土遺物は南部のＴＲ17～25 に分布する傾向を示し、調査区の北東側へ行くに従い遺物出土量は減少する。

土器・陶磁器の属する時期は、縄文時代前期末と続縄文期、近世以降に位置づけられ、長岡城が存在していた中世のものは散見される程度の出土量である。縄文時代前期末の土器は、円筒下層ｄ式土器で、本遺跡の集落はこの頃に形成されたものと推察される。近世の磁器は肥前（系）に相当し、ⅣからⅤ期（17 世紀末から幕末）までのものがあり、調査区南側の林に多出する傾向にある。

1）土器・陶磁器

３群　３点のみ出土した。図 89－１～３は３群４類の土器である。２・３はＴＲ20 から検出され、１はその後の工事立会調査でＴＲ20 付近から回収した。１は口縁部破片で、若干屈曲する器形である。口縁端部と口縁に縄線文、胴部には結節回転文が施される。２～４は胴部破片。２は単軸絡条体の回転文、３は羽状縄文が施される。

６群　２点のみ出土した。４・５は６群とみられる土器。ともに無文であるが、薄いつくりで胎土などの特徴が市内で出土している後北Ｃ$_2$・Ｄ式土器に類似する。仮にこれが後北Ｃ$_2$・Ｄ式土器であれば、市内では米代川以南で初めての事例となる。ともにＴＲ20 出土。

８群　28 点出土した。６～８は染付磁器。６・７はＴＲ25 出土の碗である。６は端部がやや外反する口縁部。口縁部内面に四方襷と思われる文様がみられる。おそらく饅頭心タイプになるとみられる。[1] 小野分類（小野 1982）のＥ群に相当し、16 世紀中頃に比定される。７は肥前産とみられる。８は皿である。高台は削り出しである。畳付をのぞいて釉がかかり、やや青味をおびた灰白色を呈する。素地は灰白色できわめて精良・堅緻である。９～14 は陶器。このうち９～12 は擂鉢である。９は口縁部に突帯を貼り付ける。内外面赤褐色を呈する。須佐唐津である。[2] 18 世紀後半から幕末頃か。10～12 は体部破片で、10・11 は内外面に鉄釉を塗る。10 は肥前産で 18 世紀。11 は産地不明。12 は太いおろし目をもつ。にぶい橙色で堅緻。酸化焔焼成であるが、珠洲焼か。13 は土瓶か土鍋の底部。京・信楽系で 18 世紀から 19 世紀。14 は鍋類の蓋。産地・年代ともに不明。15 はデイサイト製の台石で石皿の転用品の可能性がある。

1）平泉町　八重樫忠郎氏のご教示による。

2）愛知学院大学文学部　藤澤良祐教授のご教示による。

(5)　まとめ

平成 19・20 年度に引き続き、長岡城跡の内容を確認するための詳細分布調査を実施した。遺構はＴＲ25 から溝跡２条、土坑１基、ＴＲ11・16・20～22 から柱穴様ピットが検出されたものの、分布は極めて希薄である。また、中世以前の遺物の出土地点は、ＴＲ20 から縄文土器や続縄文土器などが少量得られたのみで、調査区北西部にのみ分布している。

なお、ＴＲ７～10・14～18 は、本来の遺物包含層であるⅡ～Ⅲ層がほとんど残存していなかった。遺物も出土していないことから、道の駅ひないの駐車場に隣接する平坦面のほとんどの部分は消失している可能性が高い。また、比内総合支所駐車場に面した平坦面（ＴＲ21～23）からも遺構はほとんど検出されず、近代に地形改変をされているようであり、平坦面については城跡の遺構ではないと考えられる。

以上のことから、今回の工事対象地については、調査結果図に示したとおり、遺構が検出されたトレンチを包括し、Ⅱ層以下が残存する地点を結ぶ範囲を保護措置の必要な範囲と考える。措置の内容は、工事立会等の軽微なものが妥当と思われる。ただし、溝跡が検出されたＴＲ25 近辺については、遺構が良好に残存している可能性が高いため、掘削が及ぶ場合は本調査が必要である。

なお、平成 26 年８月 19 日～９月 12 日に事業者の協力のもと、工事立会調査を実施した。

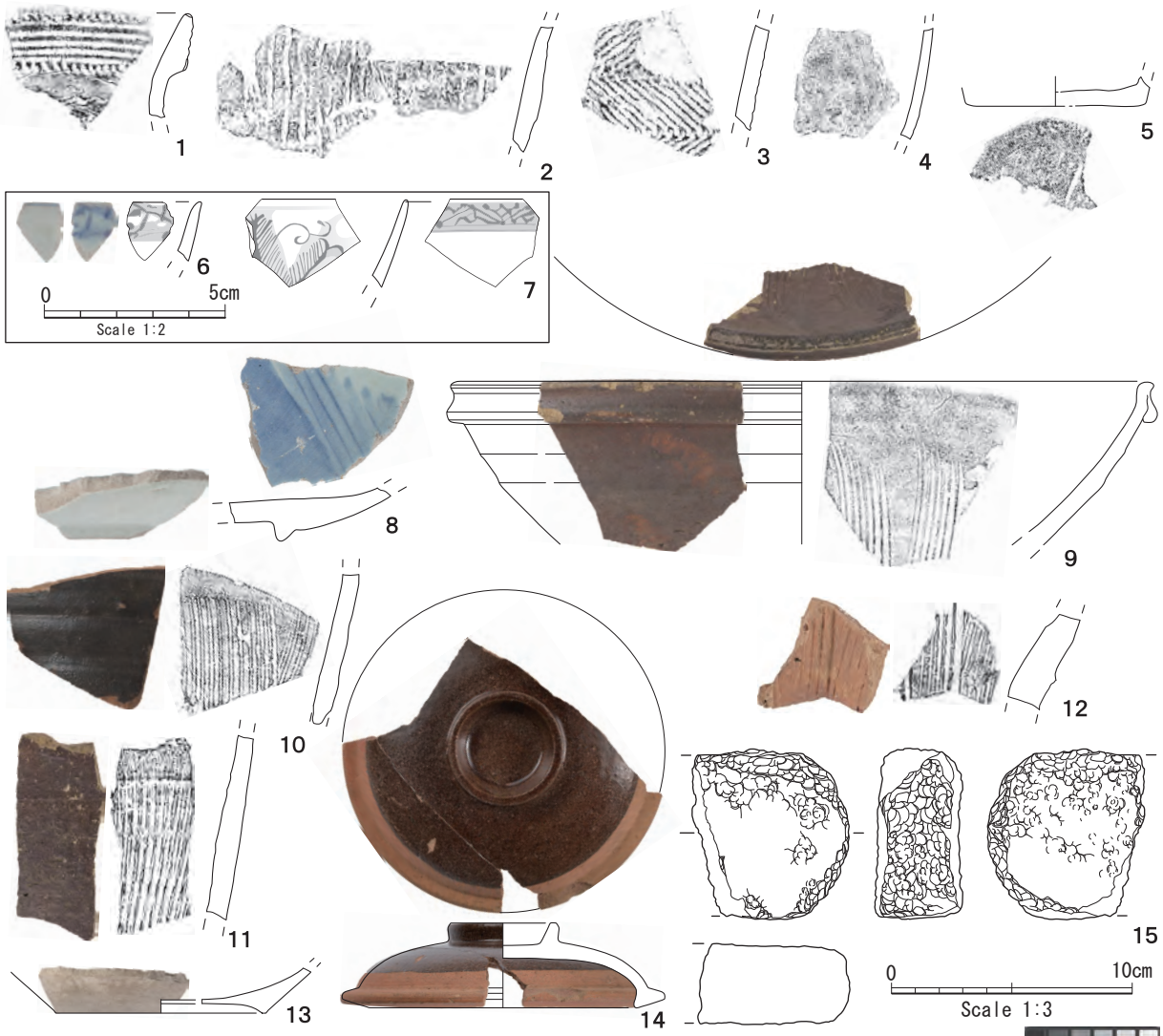


図89　出土遺物

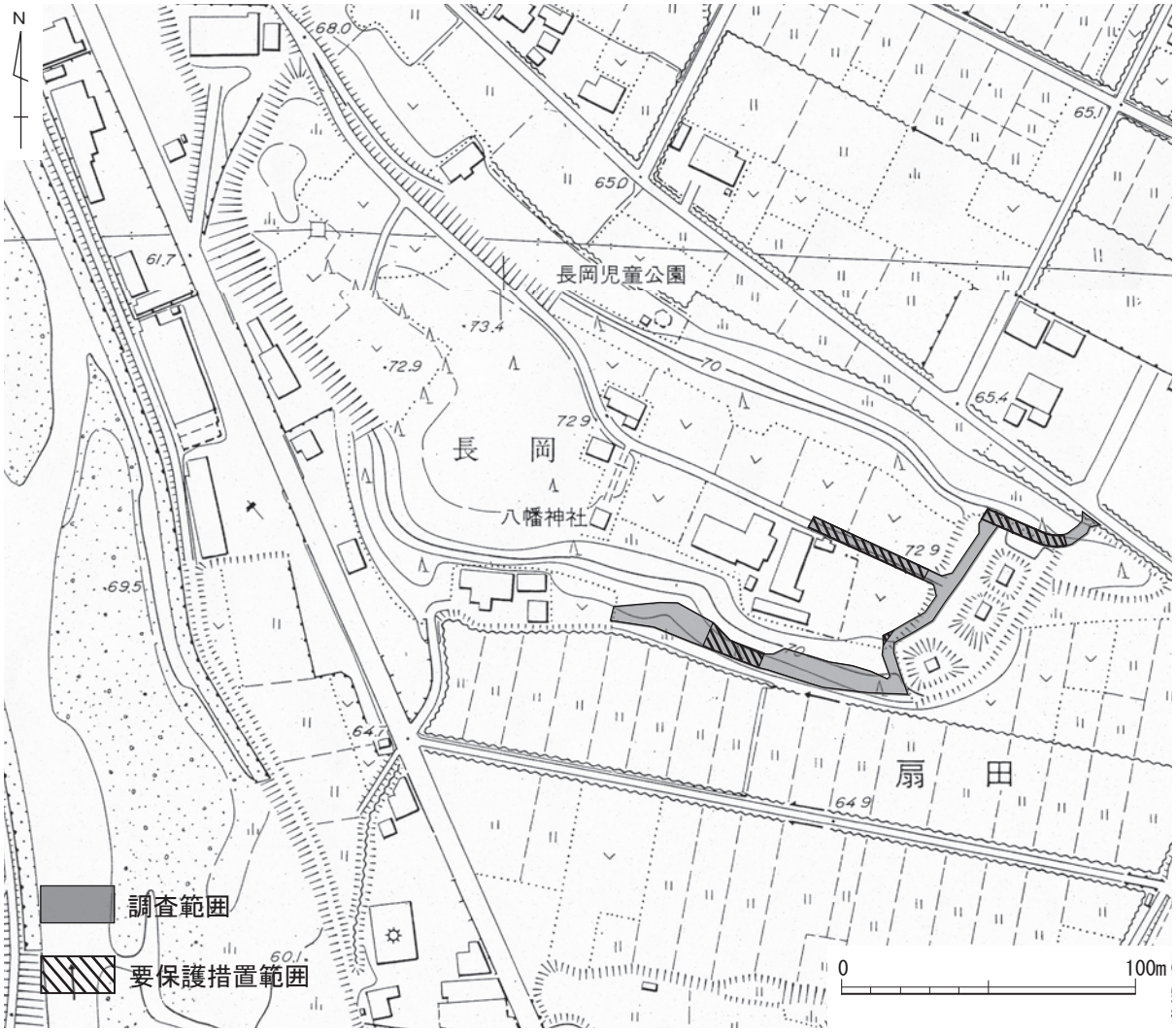


図 90　調査結果図（１：2,500）

表23　種別遺構一覧

土坑	溝跡	柱穴様ピット	計
1	2	6	9

表24　遺構計測一覧

遺構種別	遺構番号	規模 確認面(m)	規模 底面(m)	規模 深さ(m)	長軸方向 N－W	トレンチ
溝跡	ＳＤ1	1.10 × －	0.65 × －	0.55	69°	25
	ＳＤ2	0.95 × －	0.56 × －	0.25	63°	25

表25　出土遺物一覧

調査区	P 3 4	P 6	P 8 1	P 8 2	P 8 3	P 計	S 1 7	S 4	S 計	W	合計
ＴＲ16								1	1		1
ＴＲ17			1	1		2					2
ＴＲ18								1	1		1
ＴＲ20	3	2				5	1		1		6
ＴＲ21			3	2	1	6					6
ＴＲ22				1		1		1	1		2
ＴＲ23			4	1		5					5
ＴＲ25			4	7		11				11	22
ＴＲ26			1	1		2					2
表採			1			1					1
合計	3	2	14	13	1	33	1	3	4	11	48

北東部近景（北東から）

Ｔ3 調査状況

Ｔ5 調査状況

Ｔ7 調査状況

Ｔ11 調査状況

Ｔ16 調査状況

Ｔ17 調査状況

Ｔ19 調査状況

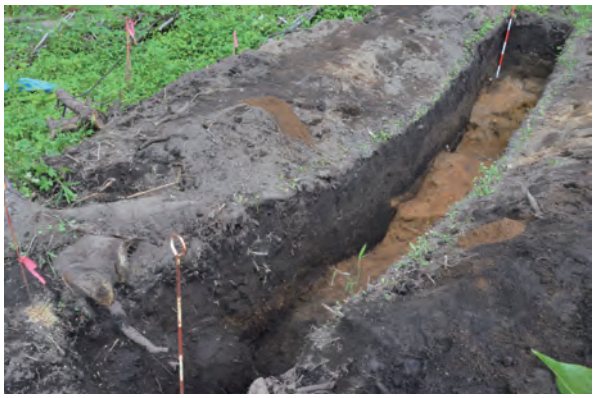
図版 31　調査状況

作業風景（調査区南側）

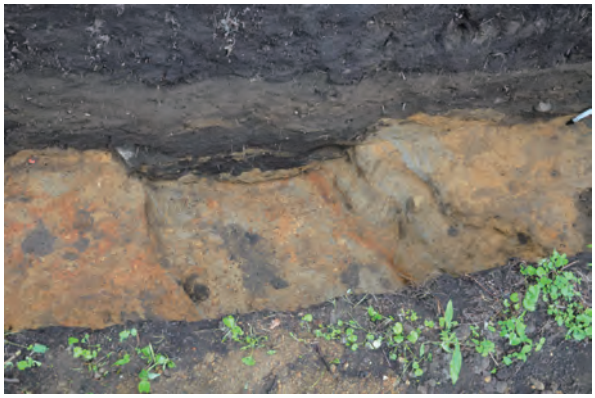
Ｔ21 調査状況

Ｔ22 調査状況

Ｔ23 調査状況



Ｔ25 調査状況



ＳＤ1 完掘

ＳＤ2 完掘

出土遺物

図版 32　調査状況と出土遺物

２　比内町独鈷地区（移動通信用鉄塔施設整備事業）

(1)　調査地の位置と周辺の環境

調査を実施した地区は、大館盆地南部の段丘面に位置する。調査地の地番は比内町独鈷字炭谷 70－１、55－５で、平成 27 年度に実施した。

大館市内の遺跡の多くは米代川とその支流域の付近の丘陵や台地上に分布する。調査地は、その川の１つである炭谷川の左岸に位置しており、埋蔵文化財包蔵地の所在する可能性がある地区であることから調査を行った。調査地の位置は、北緯 40 度９分 38 秒、東経 140 度 37 分 58 秒（世界測地系）である。標高は、161～166mほどである。調査地の南側には、千年岱遺跡と森合館跡が所在する。

(2)　調査の内容

調査対象地に任意でトレンチを設定し、表土、耕作土をバックホーまたは人力除去した後、基盤層に相当するにぶい黄褐色粘土層（Ⅸ層）まで掘り下げ、遺構・遺物の有無等を調査した。

調査地内の基本層序は、基盤をなすにぶい黄褐色粘土層の上に腐植土層が堆積する。

Ⅰ層　表土および耕作土。層厚は 56 ㎝程度。
Ⅱ層　黒色を呈する腐植土層である。層厚は 13 ㎝程度。
Ⅲ層　黒褐色を呈する土層。Ⅱ層とⅣ層の漸移層である。層厚は 17 ㎝程度。
Ⅳ層　黒褐色を呈する土層。Ⅲ層より若干明るい。層厚は 10 ㎝程度。
Ⅴ層　にぶい黄褐色火山灰層。十和田火山灰二次堆積層とみられる。層厚は 10 ㎝程度。
Ⅵ層　黒色を呈する腐植土層である。層厚は 10 ㎝程度。
Ⅶ層　黒色を呈する腐植土層である。Ⅵ層よりやや赤っぽい。層厚は 23 ㎝程度。
Ⅷ層　黒色を呈する土層である。Ⅶ層とⅨ層の漸移層である。層厚は 12 ㎝程度。
Ⅸ層　にぶい黄褐色を呈する粘土層。

調査の結果、遺構は発見されず、遺物はトレンチ１のⅥ～Ⅶ層から縄文土器２点、石器類２点を得た。いずれも流れ込みと思われる。

図 92－１は５群土器の底部破片。後期の台付鉢と思われる。

(3)　まとめ

遺構は検出されず、遺物は散発的にわずかに見られるのみであり、出土状況から流れ込みと考えられる。したがって、今回の調査区は遺跡のエリアに入るとは考えがたい。

図 91　調査区と周辺の地形（1：2,500）

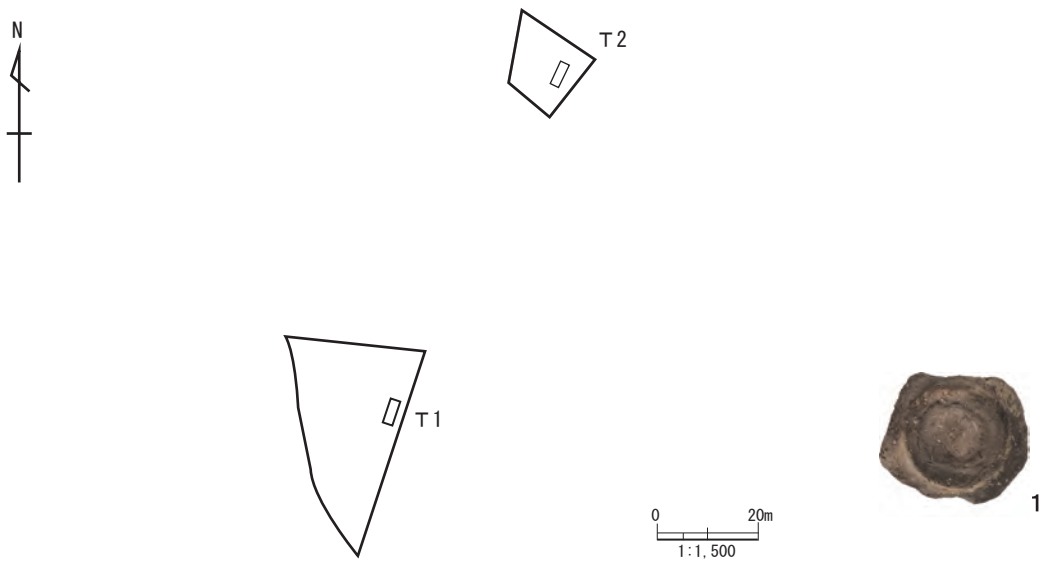


図 92　調査位置と出土遺物

調査地遠景（T1、南から）

T1 完掘（西から）

調査地遠景（T2、北東から）

T2 完掘（南西から）

図版 33　調査状況

３　真館Ⅱ・Ⅲ遺跡（福祉施設新築工事）

(1)　遺跡の位置と周辺の環境

真館Ⅱ遺跡と真館Ⅲ遺跡は、米代川支流の犀川右岸に所在する。真館Ⅱ遺跡は、平成 24 年度に大館市教育委員会が実施した試掘調査により発見された縄文・平安時代の集落跡である。遺跡の位置は、北緯 40 度 12 分 55 秒、東経 140 度 35 分 12 秒（世界測地系）である。標高は 73～74mである。

真館Ⅲ遺跡は、平成 24 年度に秋田県文化財保護管理指導員の鷹嘴勇二氏により発見された縄文・平安時代の集落跡である。遺跡の位置は、北緯 40 度 12 分 57 秒、東経 140 度 35 分 11 秒（世界測地系）である。標高は 73mである。

真館Ⅱ遺跡の東側には、袖ノ沢遺跡と横沢遺跡、北東側には大岱遺跡が所在する。

(2)　調査の内容

作業は、調査対象地に任意でテストピット・トレンチを設定し、盛土、表土をバックホーで除去した後、Ⅳ層上面まで人力で掘削する方法で実施した。テストピット・トレンチの位置情報等については、有限会社小笠原測量設計事務所の協力を得て、トータルステーションを用いて計測後、計測データの提供を受けた。

遺跡内の基本層序は、基盤をなす黄褐色粘土層の上に黒色腐植土層が堆積する単純なものである。平成 24 年度真館Ⅱ遺跡の調査（大館市文化財調査報告書第７集　2013）に準じた。

Ⅰ層　表土及び盛土。

Ⅱ層　黒色の色調を示す腐植土層である。真館Ⅲ遺跡ではほとんど残存していない。

Ⅲ層　暗褐色の色調を示す土層。Ⅱ層とⅣ層の漸移層である。真館Ⅲ遺跡では大半が失われている。

Ⅳ層　黄褐色粘土層。

今回の調査は、平成 24 年度に発見した真館Ⅱ遺跡の東部と真館Ⅲ遺跡について実施した。真館Ⅱ遺跡の現況は荒蕪地、真館Ⅲ遺跡の現況は山林である。

真館Ⅱ遺跡では、６本のトレンチを設定、掘開し、埋蔵文化財の有無及び包含層の残存状況等を調査した。調査の結果、包含層が良好に残存し、ＴＲ５では遺物がまとまって出土したものの、他の箇所では遺物はわずかに確認されたのみである。遺構は、ＴＲ３より土坑１基、柱穴４基、ＴＲ４より柱穴様ピット２基、ＴＲ５より竪穴住居跡２軒（ＳＩ１・３）、ＴＲ６より柱穴・柱穴様ピット 10 基を発見し、遺物は縄文土器片１点、土師器片 51 点、陶磁器片 10 点、礫１点を得た。

真館Ⅲ遺跡は、かつて山林となっていた場所である。真館Ⅲ遺跡では、２本のトレンチと 20 個のテストピットを設定、掘開し、埋蔵文化財の有無及び包含層の残存状況等を調査した。調査の結果、過去の造成工事等により包含層は残存していなかった。この遺跡からは、ＴＲ７より落し穴とみられる溝状土坑４基、柱穴様ピット８基、ＴＲ８より柱穴・柱穴様ピット６基を発見した。ＴＰ26・27・28・30・32・33・34 より土坑１基、ＴＰ31 より土坑２～３基、ＴＰ35 より土坑２～３基、柱穴様ピット２基、ＴＰ 38 より土坑１基、柱穴１基を確認した。遺物はＴＰ31 より近世の土器片を２点、ＴＰ35 より土師器片を１点、ＴＰ28・40、ＴＲ８より陶磁器片を３点、ＴＰ27・33 より２点の石器を得た。

図 100－１～３は竪穴住居跡３のカマドから出土した土師器甕。内外面にナデ、ケズリを施す。４は竪穴住居跡１から出土した砥石である。５は５群土器とみられる口縁部小破片で、外面に

図 93　調査区と周辺の地形（1：2,500）

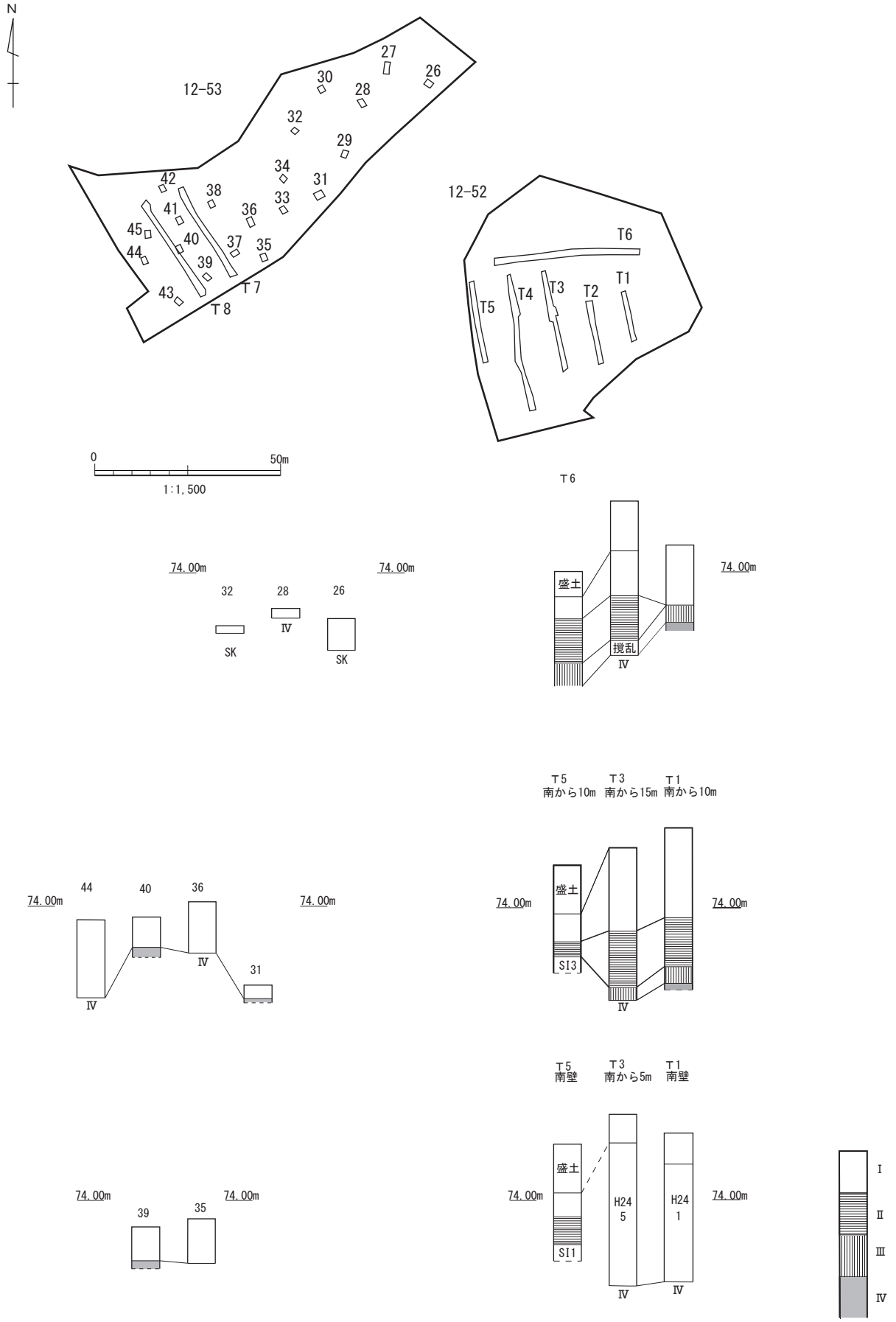

N
12-53
12-52
T6
T5
T4
T3
T2
T1
T7
T8
0
50m
1:1,500
74.00m
32
28
26
SK
IV
盛土
撹乱
T5
南から10m
T3
南から15m
T1
南から10m
44
40
36
31
SI3
T5
南壁
T3
南から5m
T1
南壁
39
35
SI1
H24
5
H24
1
I
II
III
IV

図 94　調査位置図

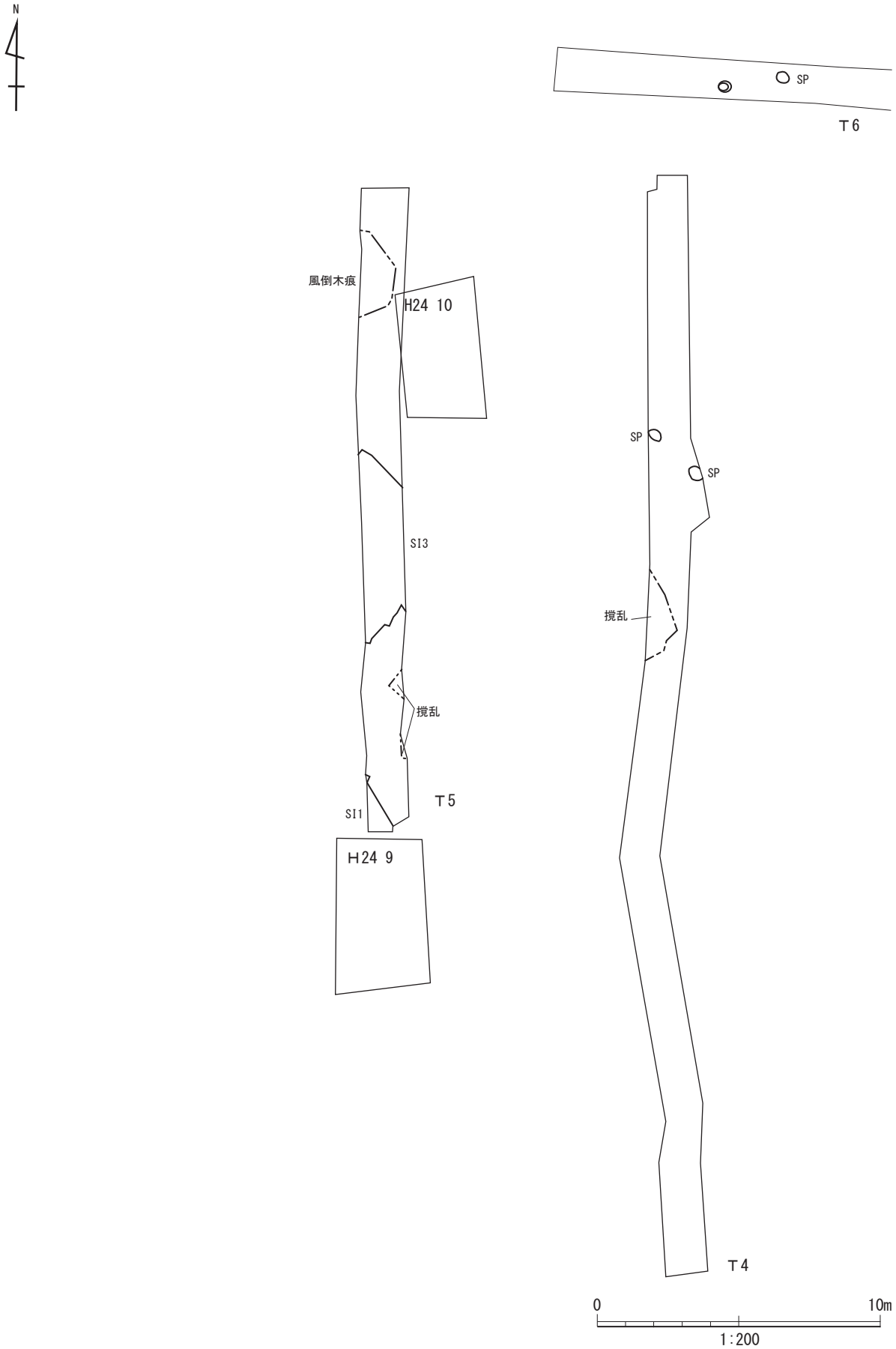


図 95　検出遺構図（真館Ⅱ遺跡地点 1）

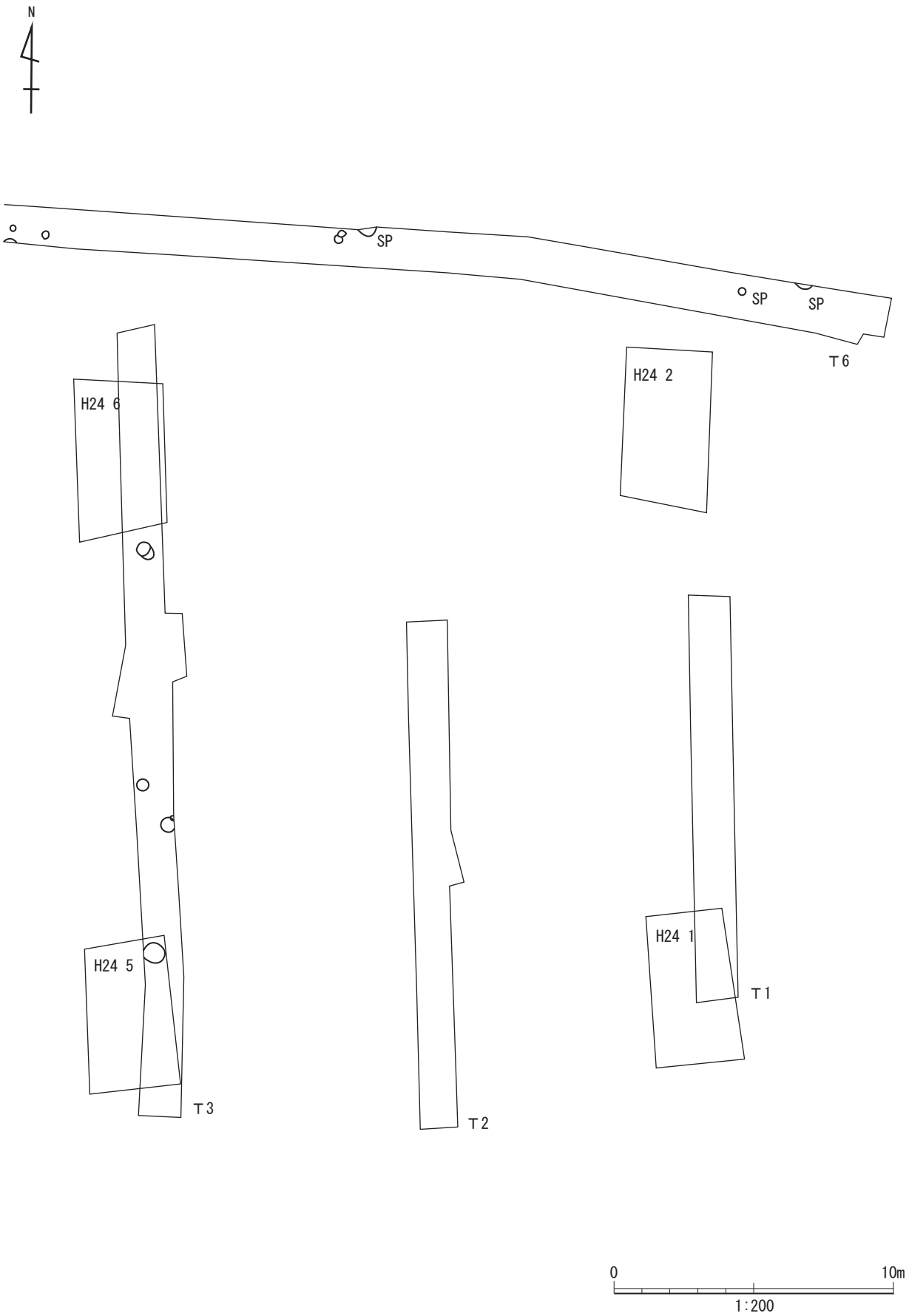


図 96　検出遺構図（真館Ⅱ遺跡地点 2）

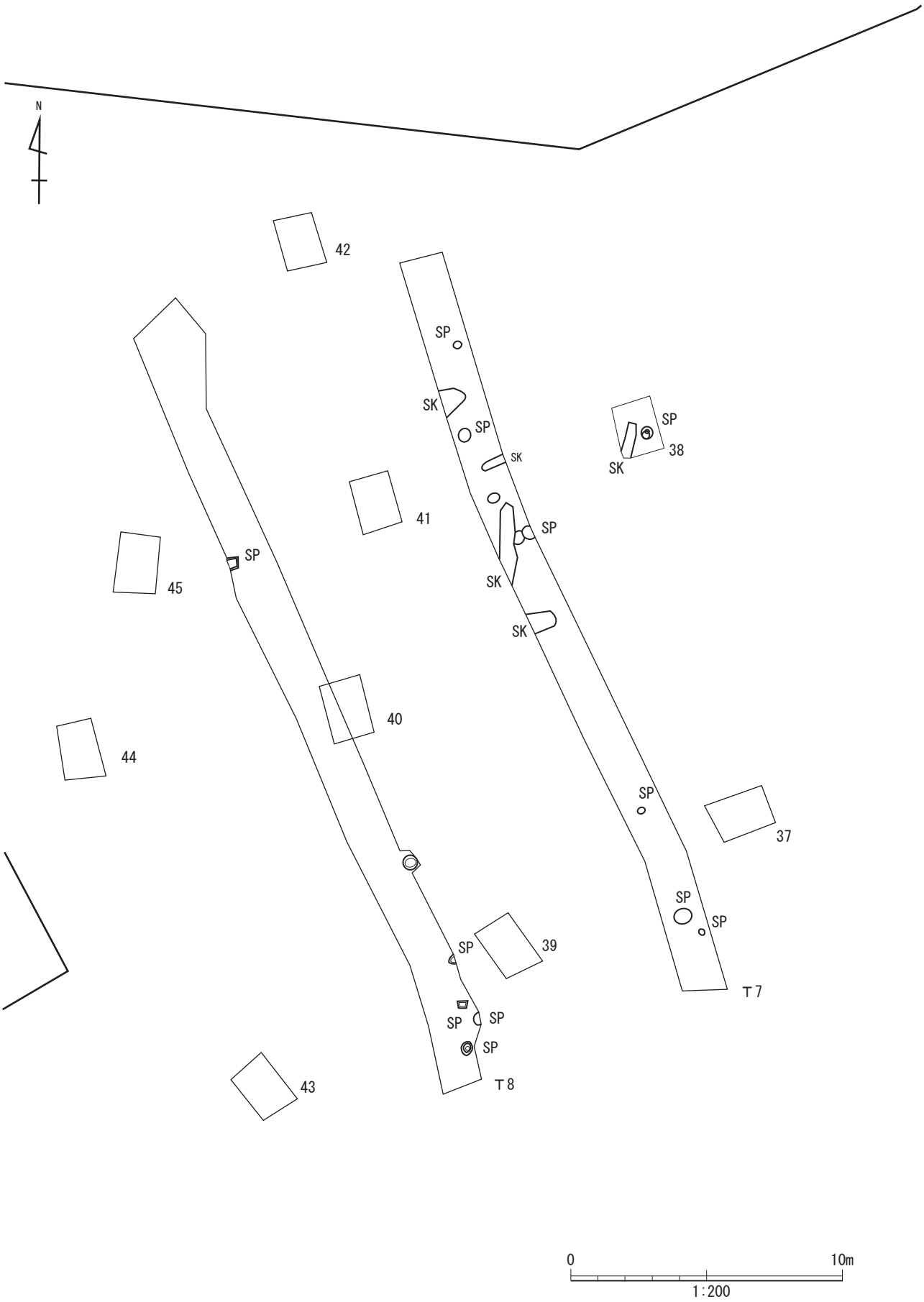


図 97　検出遺構図（真館Ⅲ遺跡地点 1）

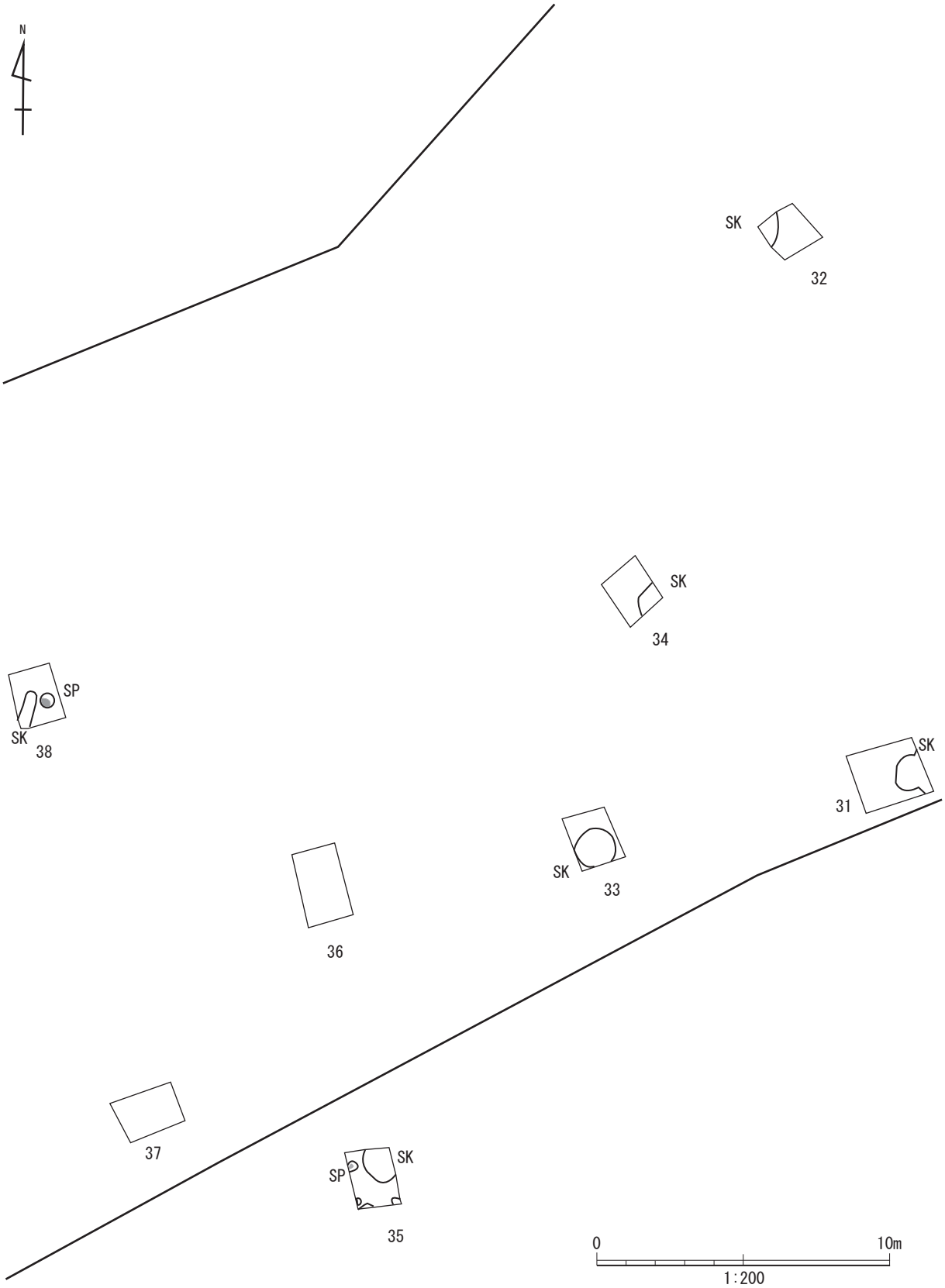


図 98　検出遺構図（真館Ⅲ遺跡地点 2）

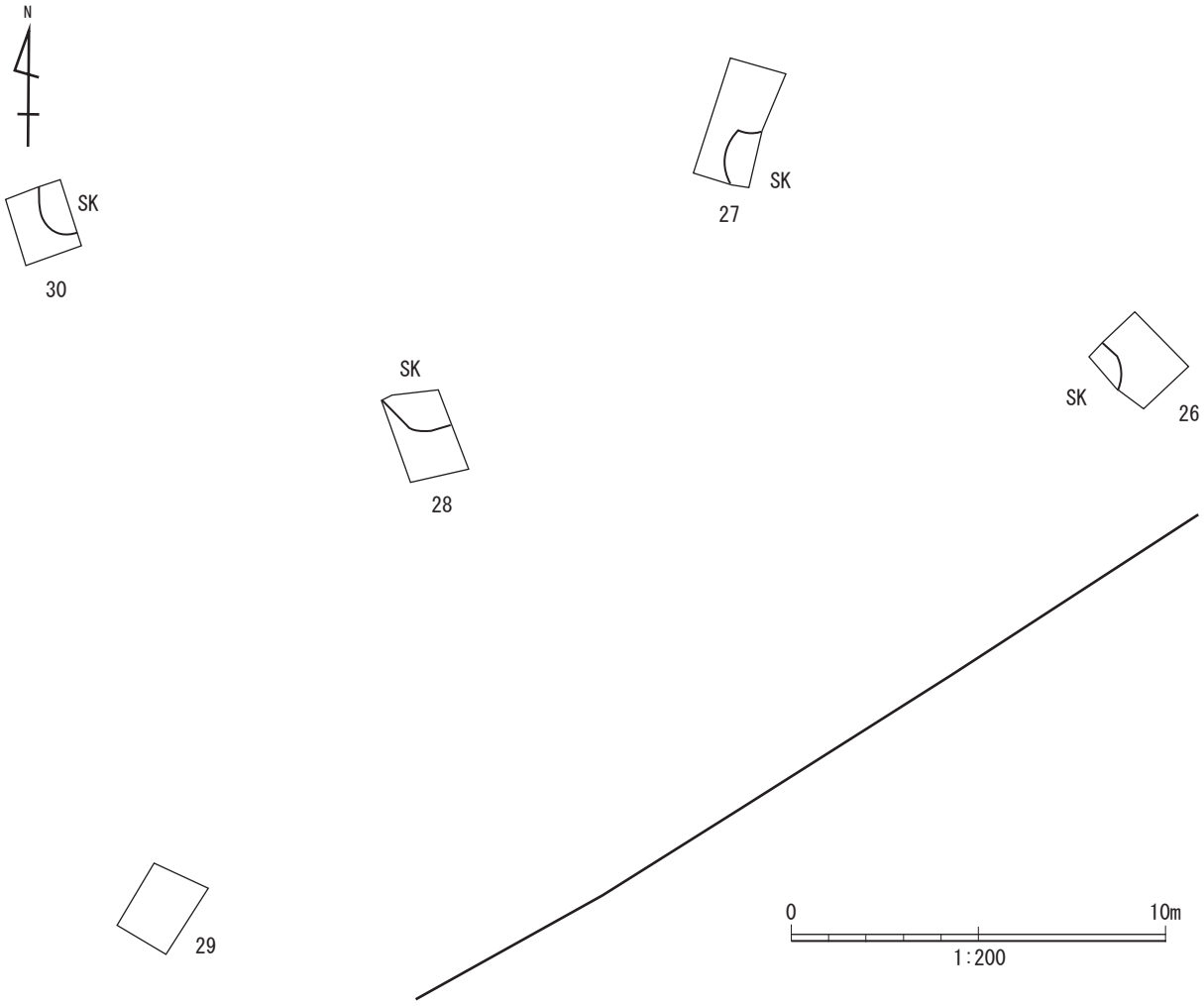


図 99　検出遺構図（真館Ⅲ遺跡地点 3）

縄文がわずかに確認できる程度である。ＴＲ６西部出土。６～８は近世の遺物である。６は磁器染付碗体部破片で外面に網目文がみられる。ＴＲ６表面採集。17 世紀後半。７は擂鉢。産地不明。ＴＲ６出土。８は土器の土風炉で、真館Ⅲ遺跡ＴＰ31 の土坑上面から出土。

(3)　まとめ

真館Ⅱ遺跡については、遺物の出土地点をまとめると、表27のとおりとなり、調査区全体に分布している。しかし、ＴＲ１・２からは遺構が一切確認されておらず、調査区東部の遺構分布は希薄である。竪穴住居跡はＴＲ５からのみ確認されており、調査区の西側が本遺跡の主体部であると考えられる。

真館Ⅲ遺跡については、ＴＲ７では縄文時代の落し穴と考えられる溝状土坑が比較的濃厚に分布している。ＴＲ８からは柱穴や柱穴様ピットが確認されたが、いずれも深さが数㎝と浅く、時期等の詳細は不明である。遺物はＴＰ31より近世の土器片を２点、ＴＰ35より土師器片を１点、ＴＰ28・40より陶磁器片を２点、ＴＰ 27・33より石器を２点得た。本遺跡の範囲はＴＲ８から東側へと拡がると考えられる。

これらの結果を受けて、建設場所は真館Ⅱ遺跡の主体部を避け建てられることとなり、一部は真館Ⅲ遺跡にかかることは避けられないことから、平成 30 年８月 28 日～９月 27 日の期間で発掘調査を実施することとなった。

なお、発掘調査は当委員会が実施し、発掘費用は事業主が負担した。調査結果については、来年度の報告書刊行を予定している。

表26　種別遺構一覧

遺跡	竪穴住居跡	土坑	柱穴・柱穴様ピット	計
真館Ⅱ遺跡	2	1	16	19
真館Ⅲ遺跡		16	20	36
計	2	17	36	55

表27　真館Ⅱ遺跡出土遺物一覧

分類 / 調査区遺構	P				S	合計
	5	7	8	計	4	
		2				
ＳＩ１		4		4	1	5
ＳＩ３		38		38		38
ＴＲ１		1		1		1
ＴＲ２		2		2		2
ＴＲ３		1	3	4		4
ＴＲ４			1	1		1
ＴＲ５		5	2	7		7
ＴＲ６	1		2	3		3
表採			2	2		2
合計	1	51	10	62	1	63

表28　真館Ⅲ遺跡出土遺物一覧

分類 / 遺構	P				S	合計
	7	8		計	2	
	2	1	3			
ＴＰ28ＳＫ		1		1		1
ＴＰ31ＳＫ			2	2		2
ＴＰ27					1	1
ＴＰ33					1	1
ＴＰ35	1			1		1
ＴＰ40		1		1		1
ＴＲ8		1		1		1
合計	1	3	2	6	2	8

図100　出土遺物

図 101　調査結果図（１：2,500）

真館Ⅱ遺跡近景（東から）

作業状況（南から）

Ｔ3（南から）

Ｔ3 遺構検出状況（西から）

Ｔ4 遺構検出状況（北東から）

ＳＩ1 遺構検出状況（東から）

ＳＩ3 遺構検出状況（南西から）

Ｔ6 柱穴検出状況（南から）

図版 34　真館Ⅱ遺跡調査状況

真館Ⅲ遺跡近景（南から）

調査状況（東から）

26（南から）

27（南から）

28（南から）

30（南から）

28（南から）

32（南から）

図版 35　真館Ⅲ遺跡調査状況（1）

33（南から）

34（南から）

35（東から）

38（南から）

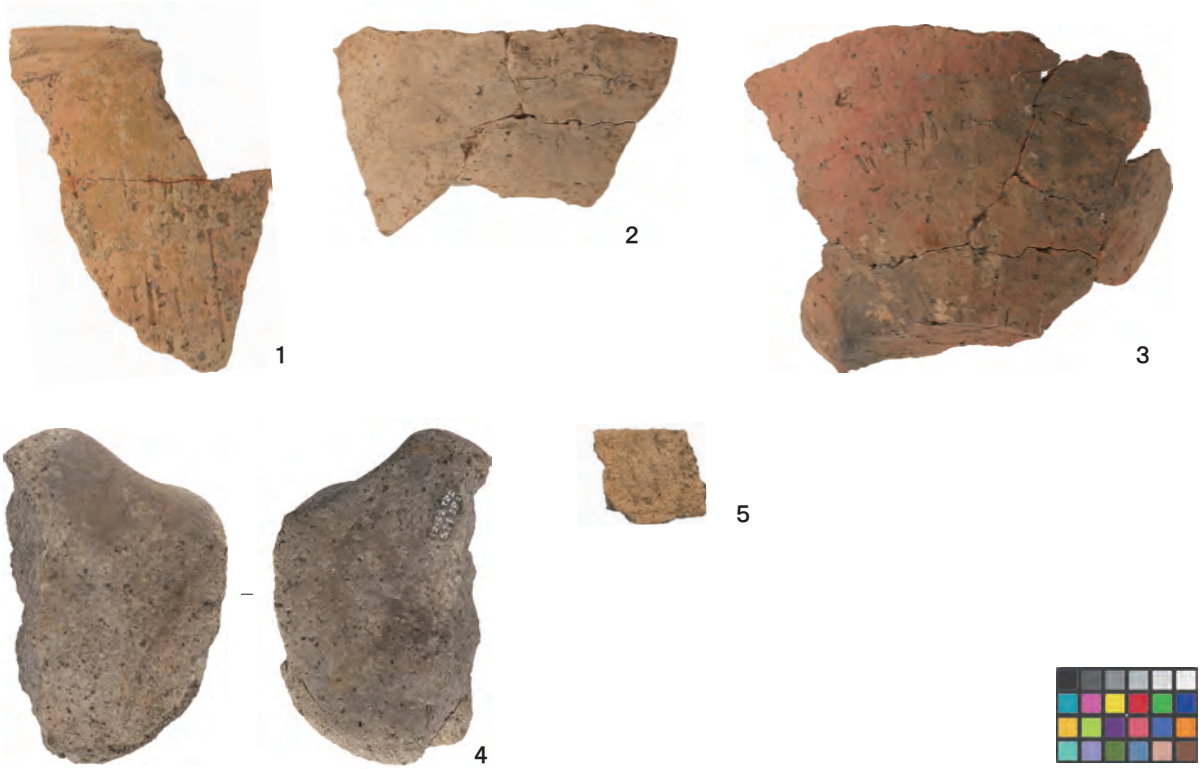
T7 遺構検出状況（南から）

T7 北部遺構検出状況（南東から）

T8 遺構検出状況（南から）

T8 南部柱穴様ピット完掘（南西から）

図版 36　真館Ⅲ遺跡調査状況 (2)



図版 37 出土遺物

4　片貝遺跡隣接地（携帯電話無線基地局建設）

(1)　遺跡の位置と周辺の環境

片貝遺跡は、米代川の支流の一つである引欠川に注ぐ沢跡に面した台地上に所在する。本遺跡は平成 27・28 年に秋田県埋蔵文化財センターが実施した発掘調査により、縄文時代と平安時代の複合遺跡であることが明らかにされている。また、本遺跡の南西側には、片貝家ノ下遺跡が所在する。片貝家ノ下遺跡では、平安時代の噴火によって発生したシラスに埋没した住居跡や水田が検出されたほか、レーダー探査では古墳と思われる遺構も検出されている。

調査地は、片貝遺跡の南側にある沢跡に挟まれた対岸の隣接する台地上である。調査地の位置は、北緯40度13分19秒、東経140度33分42秒（世界測地系）である。標高は68ｍである。

調査地の南側に続く台地上に笹館城跡、東側の犀川を挟んだ対岸には長岡城跡、北側には二井田館跡が所在する。

(2)　調査の内容

調査対象地に任意でトレンチを設定し、掘開した。トレンチの掘削は人力で行い、遺構・遺物の有無等を調査した。

調査地内の基本層序は、基盤をなす黄褐色粘土層上に腐植土層が堆積する単純なものである。

Ⅰ層　表土および耕作土。

Ⅱ層　黒色を呈する腐植土層である。

Ⅲ層　暗褐色を呈する土層。Ⅱ層とⅣ層の漸移層

Ⅳ層　黄褐色を呈する粘土層。

調査の結果、遺構・遺物は発見されなかった。

(3)　まとめ

遺構・遺物は確認されなかったため、今回の調査地が遺跡のエリアに入るとは考えがたい。

図 102　調査区と周辺の地形（１：2,500）

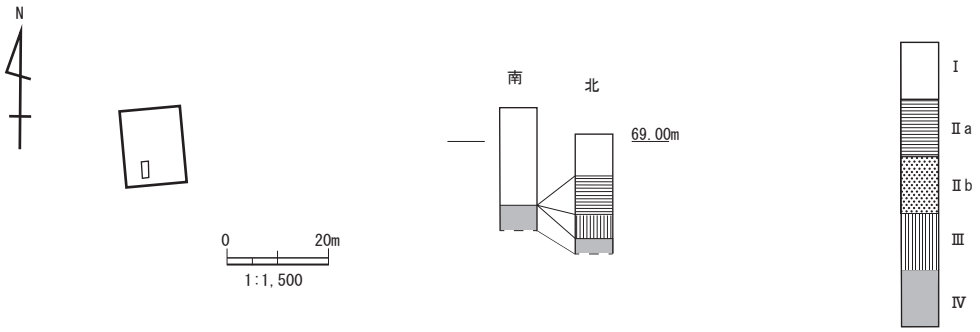
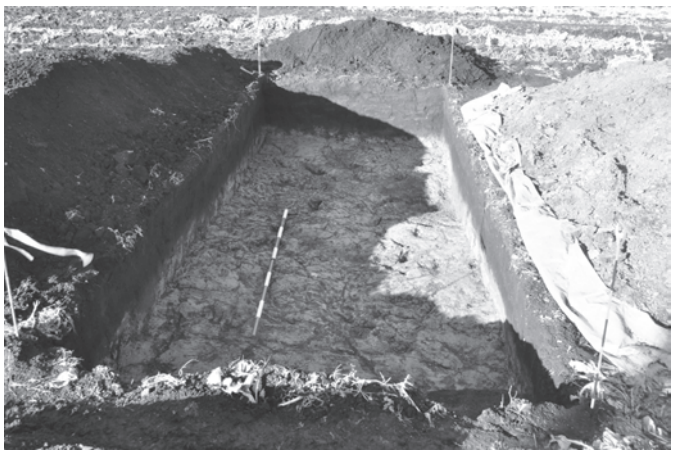


図 103　調査位置図

調査地近景（南東から）

調査地近景（西から）



トレンチ完掘（南から）

図版 38　調査状況

５　大岱遺跡隣接地（工場敷地造成工事）

(1)　調査地の位置と周辺の環境

大岱遺跡は、米代川の支流の犀川に注ぐ沢に面した台地上に所在する。遺跡の位置は、北緯 40 度 13 分 5 秒、東経 140 度 35 分 33 秒（世界測地系）である。標高は 76～80mである。

遺跡の南東側には、縄文時代早・中期および平安時代の遺跡である横沢遺跡、縄文時代前期および平安時代の遺跡である横沢Ⅱ遺跡が所在する。

調査地は、大岱遺跡の北東側約 200mのところに位置する隣接地である。

(2)　調査の内容

発掘区の設定は、調査対象地内に任意に設定した。調査対象範囲内に概ね南北方向のＹ軸とそれに直交するＸ軸を設定した。調査区における基本区画は、20×20mとし、名称は南東角の記号で表示する。

テストピットは、基本的に２ｍ角とし、Ｘ・Ｙ軸の交点のうち任意で設定した。テストピットの掘削は基盤層まで重機で行い、人力にて遺構・遺物の有無等を調査した。トレンチの位置情報等については、有限会社小笠原測量設計事務所の協力を得て計測した。

調査地内の基本層序は、基盤をなす黄褐色粘土層上に腐植土層が堆積する単純なものである。以下に基本層序を示す。なお、過去の土地造成に伴い、調査地内の大半は旧表土等が失われていた。

Ⅰ層　表土および耕作土。
Ⅱ層　黒色を呈する腐植土層である。
Ⅲ層　暗褐色を呈する土層。Ⅱ層とⅣ層の漸移層である。
Ⅳ層　黄褐色を呈する粘土層。

今回の調査により、遺構は確認されなかった。遺物は近世以降の磁器片が３点出土した。

(3)　まとめ

今回の調査の結果、遺構は確認されず、遺物は近世以降の磁器片が３点出土したのみである。したがって、今回の調査地は遺跡のエリアに含まれないことが判明した。

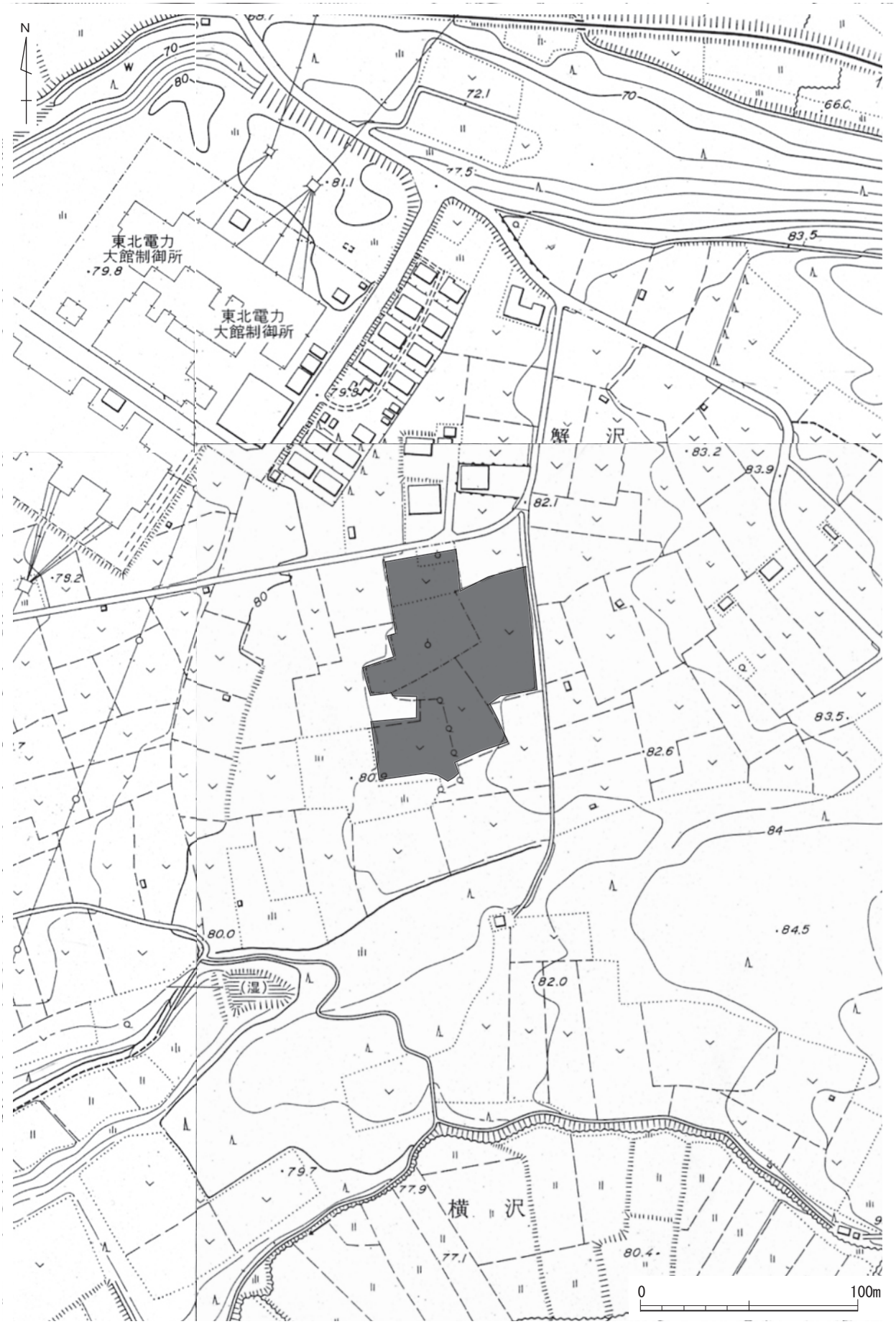


図 104　調査区と周辺の地形（1：2,500）

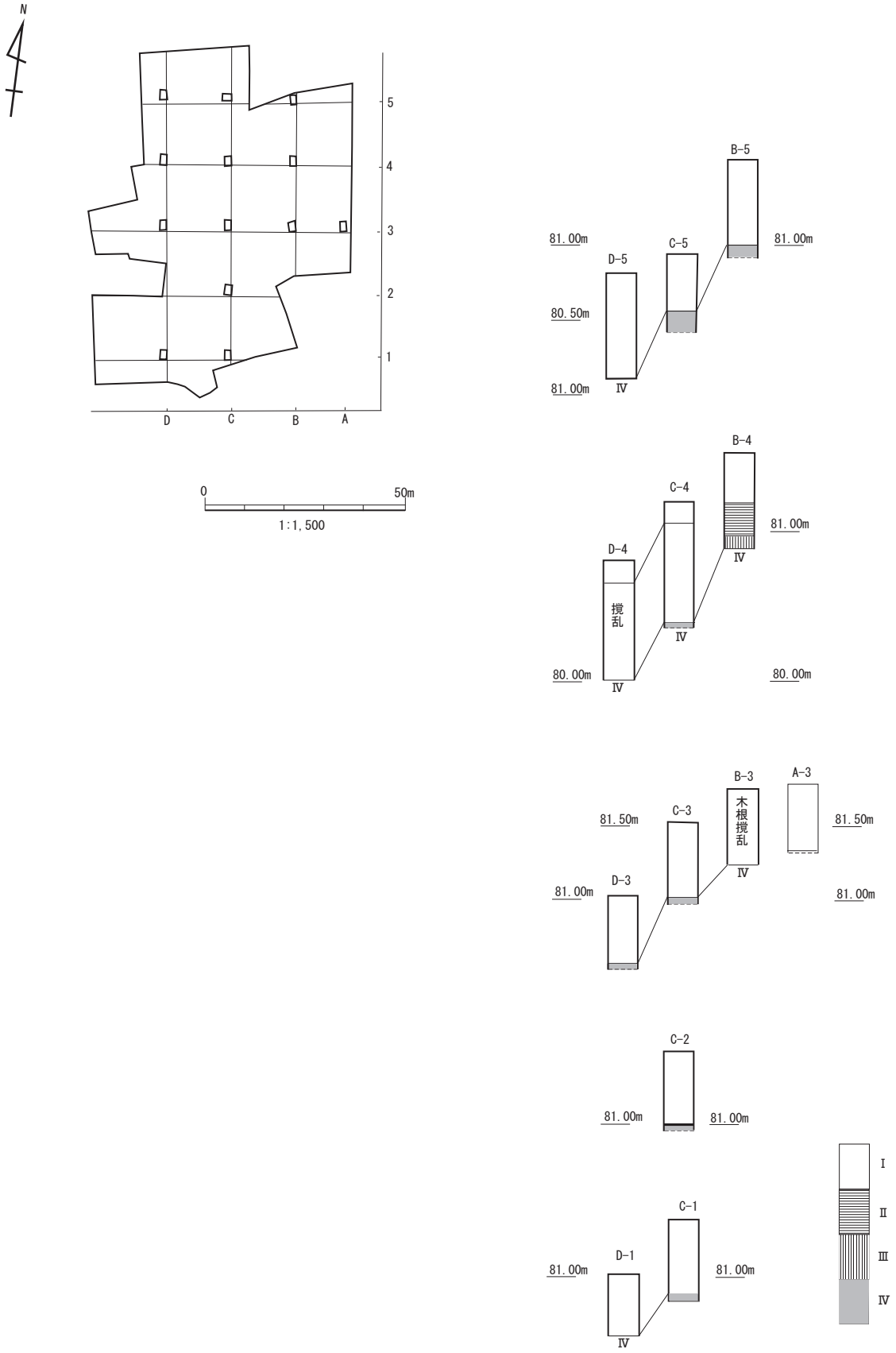
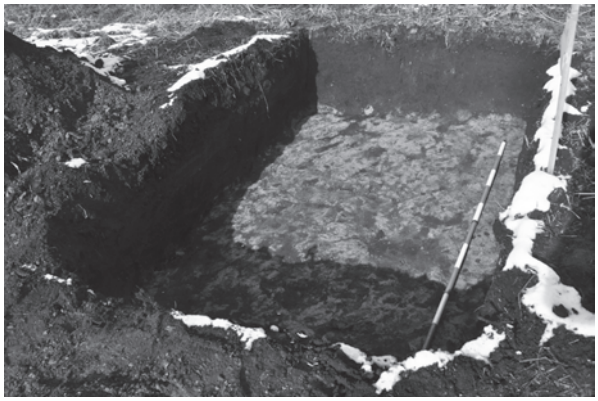


図 105　調査位置図・土層柱状図

調査地近景

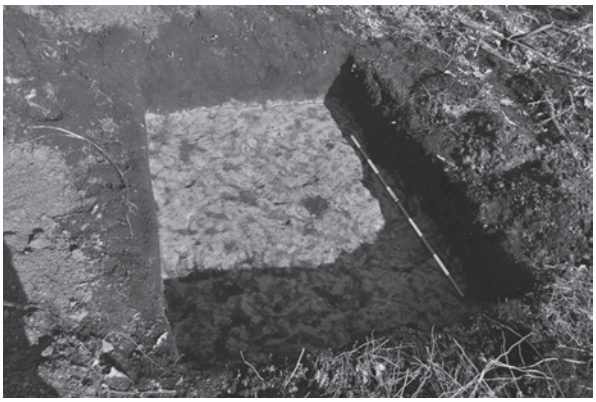
重機による掘削

作業状況



Ｂ－5

Ｃ－1



Ｃ－3

Ｄ－1

Ｄ－3

図版 39 調査状況

第４章　田代地区の調査

１　大川目元渡遺跡隣接地（養豚企業誘致事業）

(1)　遺跡の位置と周辺の環境

大川目元渡遺跡は、岩瀬川の支流の沢の右岸に所在する。遺跡の位置は、北緯 40 度 23 分 29 秒、東経 140 度 26 分 39 秒（世界測地系）である。標高は 320～330mほどである。調査地は、大川目元渡遺跡から沢を挟んだ西側の隣接地である。

(2)　調査の内容

発掘区の設定は、Ｘ・Ｙ軸のラインを東西・南北の座標軸にあわせた。発掘区における公共座標は、Ｈ－１区でＸ＝43,400.000、Ｙ＝－33,200.000、Ｍ－16 区でＸ＝43,700.000、Ｙ＝－33,300.000 である（世界測地系）。調査区における基本区画は、20×20mとし、名称は南東角の記号で表示する。

テストピットは、基本的に１ｍ角とし、Ｘ・Ｙ軸の交点にあたる箇所に設定した。また、必要に応じ、テストピットを拡張するなど、調査の精度を高めた。

テストピットの掘削は全てバックホーで行い、基盤層に相当するにぶい黄褐色粘土層（Ⅳ層）～褐色粘土層（Ｖ層）まで掘り下げ、遺構・遺物の有無等を調査した。

調査地内の基本層序は、基盤をなす褐色粘土層の上に腐植土層が堆積する単純なものである。

Ⅰ層　表土および盛土。
Ⅱ層　黒色を呈する腐植土層である。
Ⅲ層　暗褐色を呈する土層。Ⅱ層とⅣ層の漸移層である。
Ⅳ層　黄褐色を呈する粘土層。
Ｖ層　褐色を呈する粘土層。

調査の結果、遺構・遺物は検出されなかった。

(3)　まとめ

遺構・遺物は検出されなかったため、今回の調査区が遺跡のエリアに入るとは考えがたい。

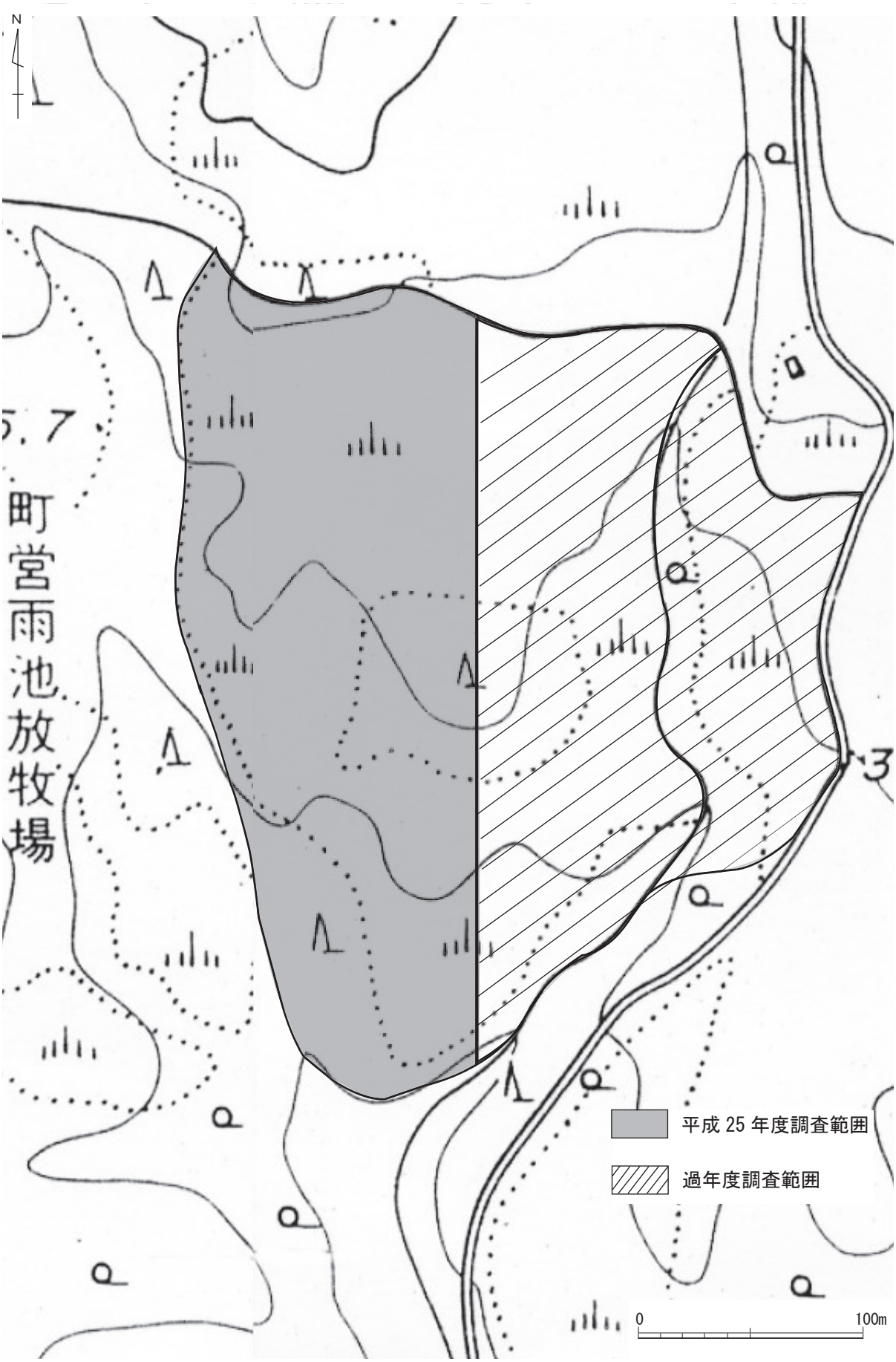


図 106　調査区と周辺の地形（1：2,500）

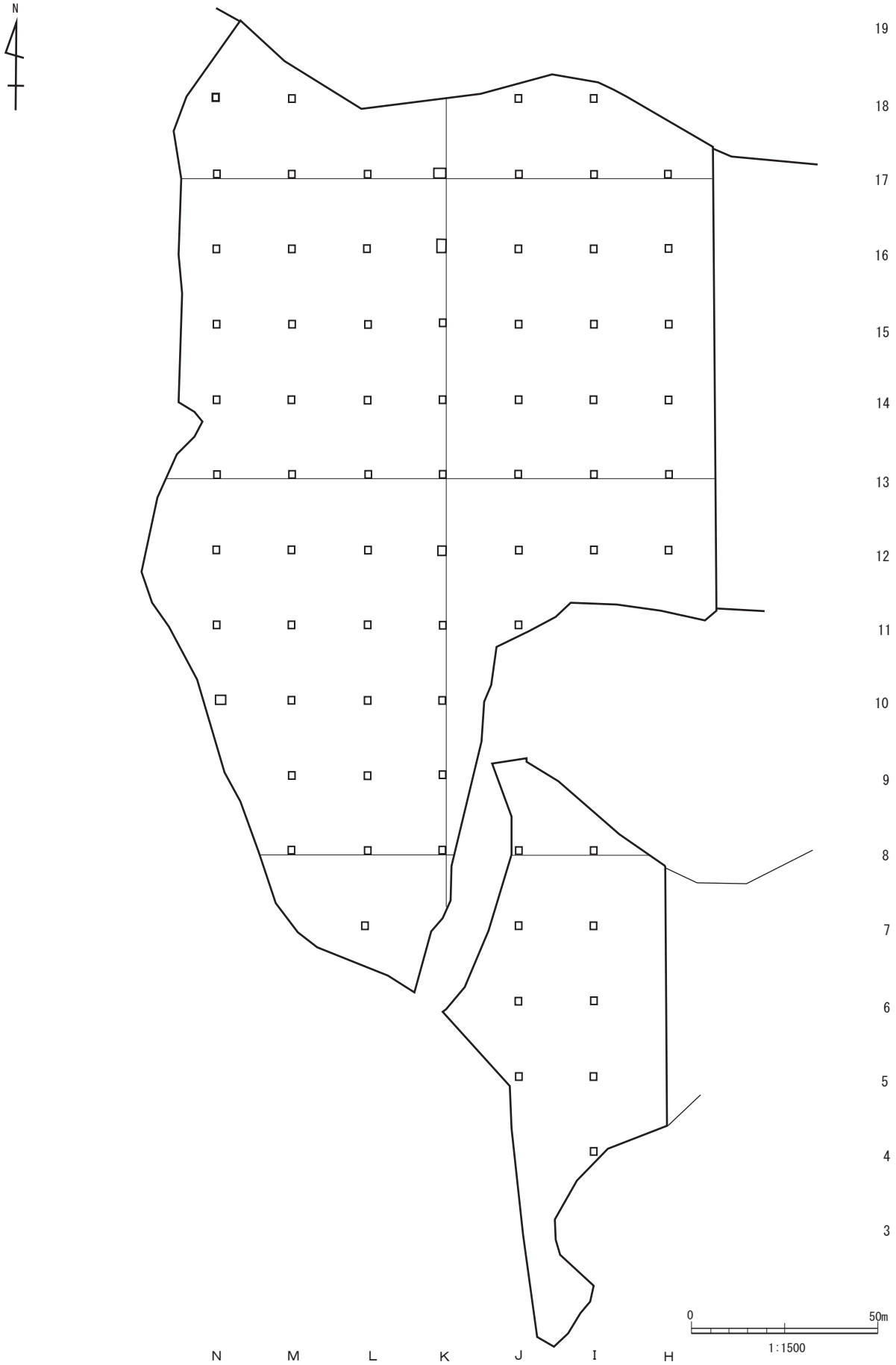


図 107　調査位置図

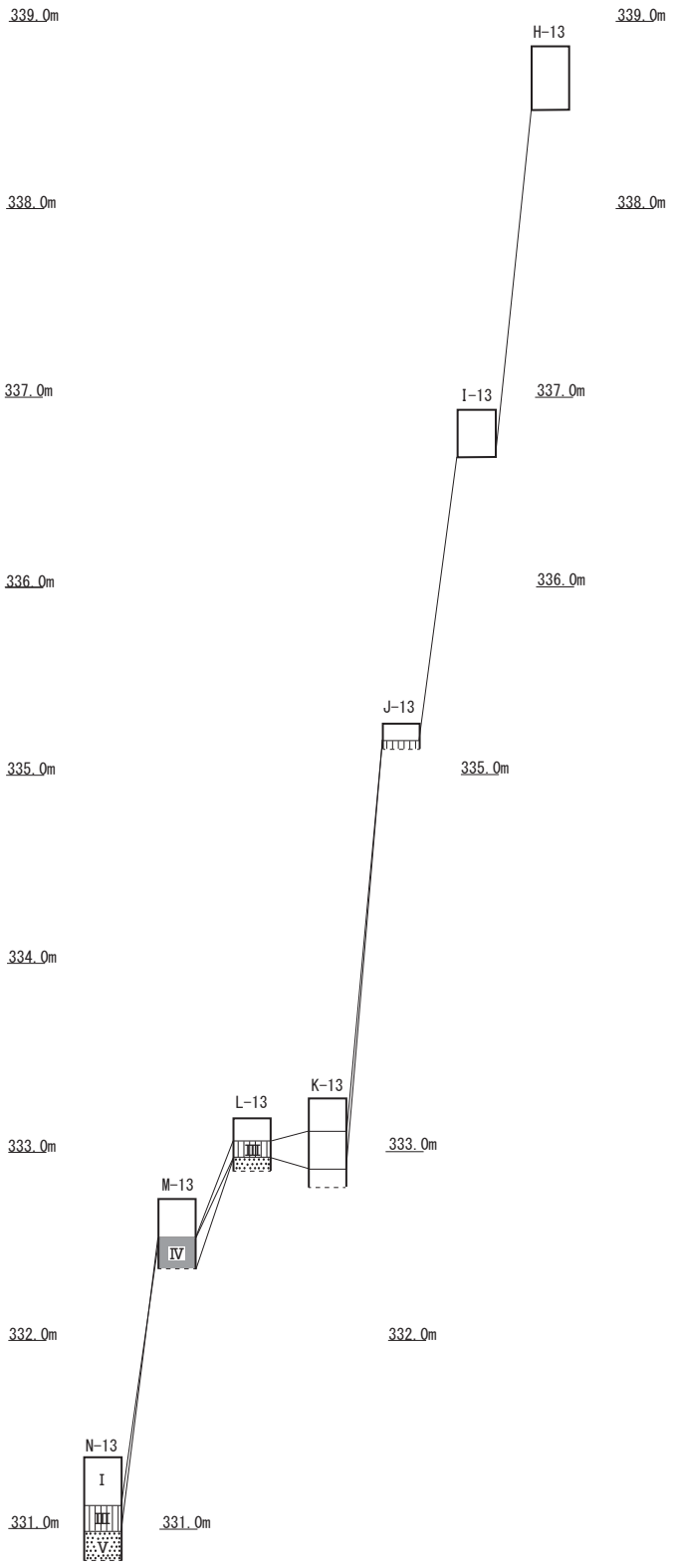

339.0m
339.0m
H-13
338.0m
338.0m
337.0m
I-13
337.0m
336.0m
336.0m
J-13
335.0m
335.0m
334.0m
K-13
L-13
333.0m
333.0m
M-13
IV
332.0m
332.0m
N-13
I
III
V
331.0m
331.0m

図 108　土層柱状図 (1)

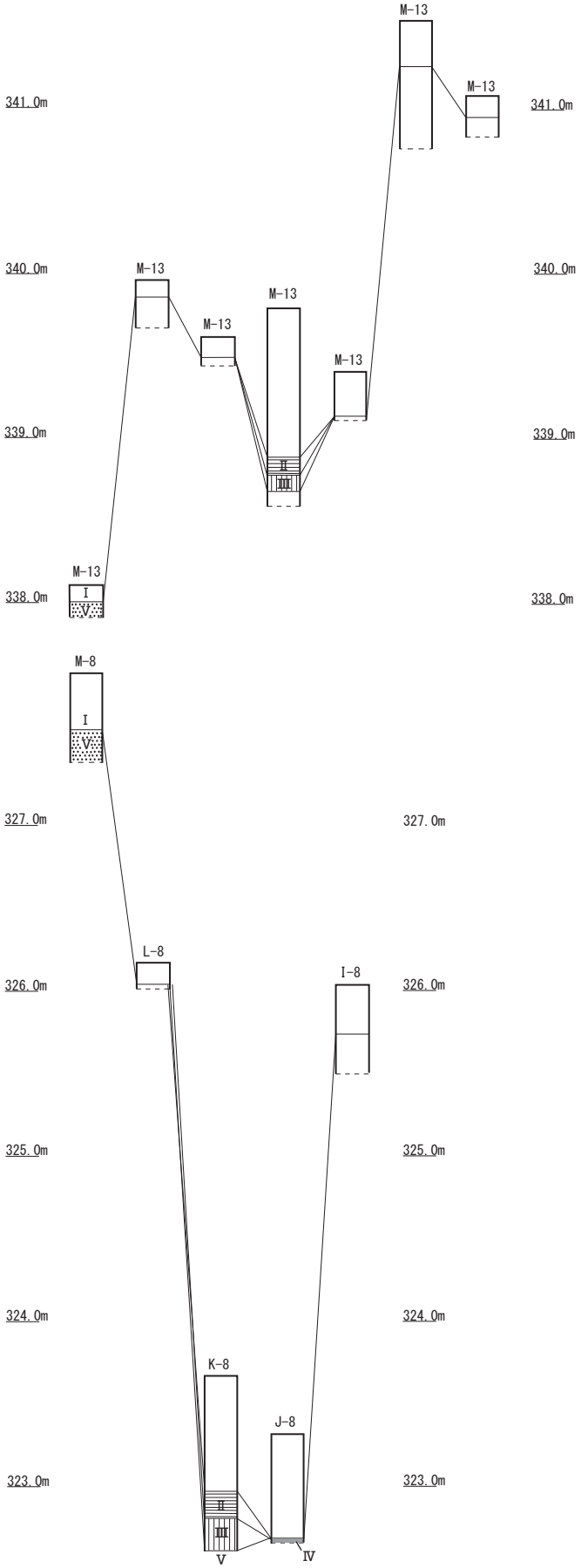

M-13
M-13
341.0m
341.0m
340.0m
340.0m
M-13
M-13
M-13
M-13
339.0m
339.0m
II
III
M-13
I
V
338.0m
338.0m
M-8
I
V
327.0m
327.0m
L-8
I-8
326.0m
326.0m
325.0m
325.0m
324.0m
324.0m
K-8
J-8
323.0m
323.0m
II
III
V
IV

図 109　土層柱状図 (2)

調査状況

K-8

M-8

K-13

N-13

I -17

K-17

M-17

図版 40　調査の状況

２　菅谷地遺跡（畜舎建設造成工事）

(1)　調査地の位置と周辺の環境

菅谷地遺跡は、大館市北西部の早口川支流の味噌内沢右岸に所在する。調査地の位置は、北緯 40 度 20 分 42 秒、東経 140 度 24 分 12 秒（世界測地系）である。標高は、171～182mほどである。本遺跡の西側には、大野遺跡と貝倉岱遺跡が所在する。

(2)　調査の内容

今回の調査は、これまで包蔵地と推定していた範囲の内部にあたる地区及び隣接する地区について実施した。調査対象地内に４本のトレンチと 23 個のテストピットを設定、掘開し、埋蔵文化財の有無及び包含層の残存状況等を調査した。調査の結果、ＴＲ１～４及びその周辺には、包含層が良好に残存していたものの、調査区南西部はⅢ層がわずかに確認されるだけであった。遺構はＴＲ１より落し穴１基、ＴＰ 12 より落し穴２基（ＳＫ 14・15）、ＴＰ 13 より柱穴様ピット２基、ＴＰ 18・20 より柱穴様ピットを各１基検出し、ＴＲ１南端の風倒木痕から縄文土器片１点と剥片１点、ＴＰ17 から剥片１点を得た。また、ＴＰ20・21 付近を中心に縄文土器片 24 点、石器 10 点を表面採集した。

図 113－１～４はＴＰ20・21 付近の道路工事により削られた土砂から表面採集した縄文土器片。詳細は不明であるが後期頃とみられる。５は削器である。

(3)　まとめ

平成 28 年度と 29 年度にわたり、菅谷地遺跡の範囲を確認するための詳細分布調査を実施した。遺物の出土地点は、調査区西部に分布している。今回の調査以前に埋蔵文化財包蔵地カードに登載していた範囲はＴＲ２・３より南西側であるが、遺跡の範囲外からは遺構は検出されず、この地区に限定される。一方、従来の遺跡範囲外のＴＰ12 から縄文時代の遺構が発見されたため、遺跡の範囲を拡大すべきと考え、平成 28 年８月４日付け 28 郷博発第 41 号にて範囲変更を行った。

以上のことから、図 114 に示したとおり、遺構を発見したＴＰ12 とＴＰ18、ＴＲ１を包括する範囲を保護措置の必要な範囲と考える。措置の内容は、発掘調査が妥当と思われる。

なお、畜舎はＴＲ１を避ける箇所に建設されることとなり、平成 28 年８月 18 日・20 日に、事業者の協力のもと、工事立会調査を実施した。

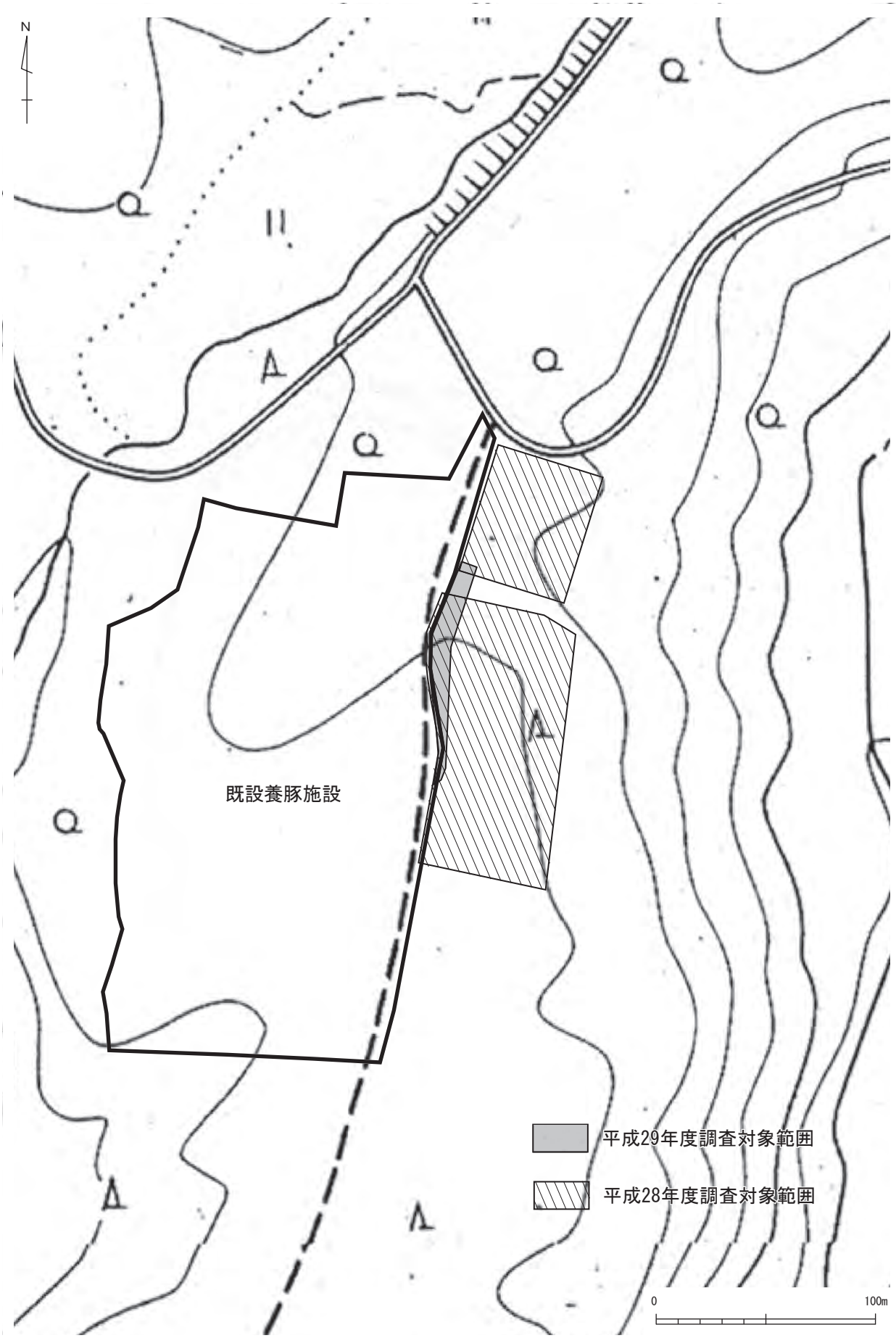


図110　調査区と周辺の地形（1：2,500）

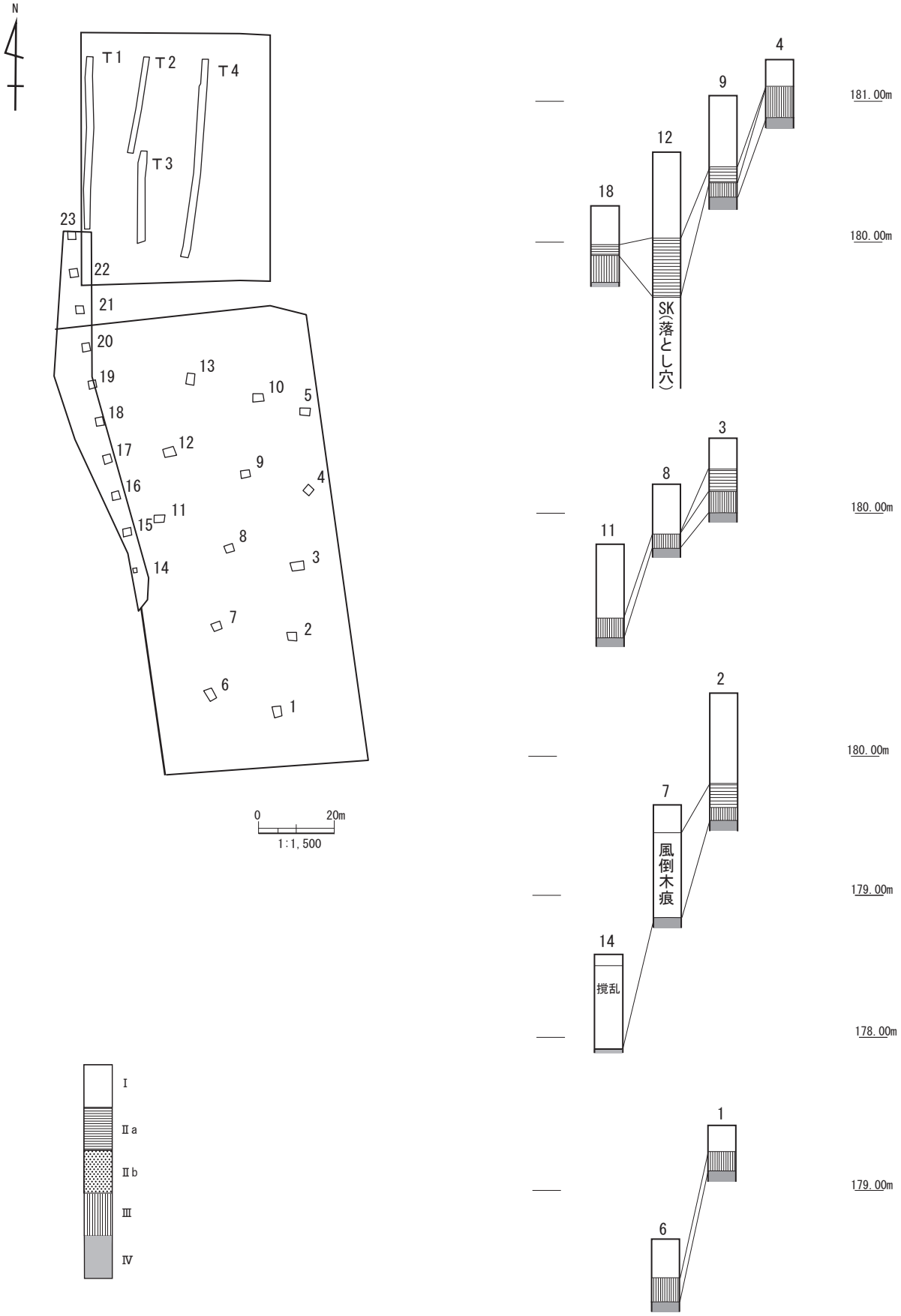

N
T1
T2
T3
T4
23
22
21
20
19
18
17
16
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
0
20m
1:1,500
Ⅰ
Ⅱa
Ⅱb
Ⅲ
Ⅳ
4
9
12
18
181.00m
180.00m
SK（落とし穴）
3
8
11
180.00m
2
7
14
180.00m
179.00m
178.00m
風倒木痕
撹乱
1
6
179.00m

図 111　調査位置図

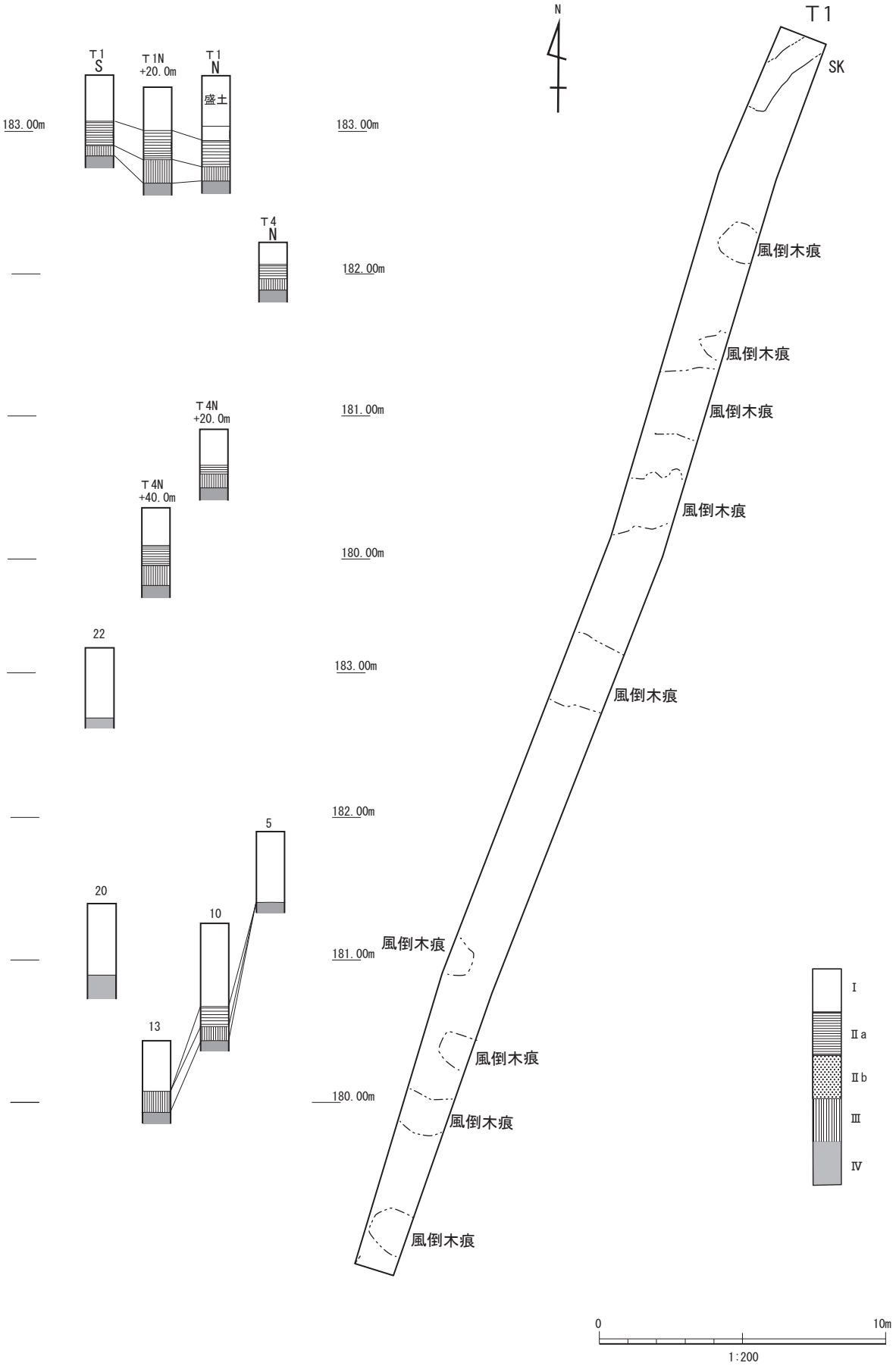


図 112　土層柱状図と検出遺構図（T1）

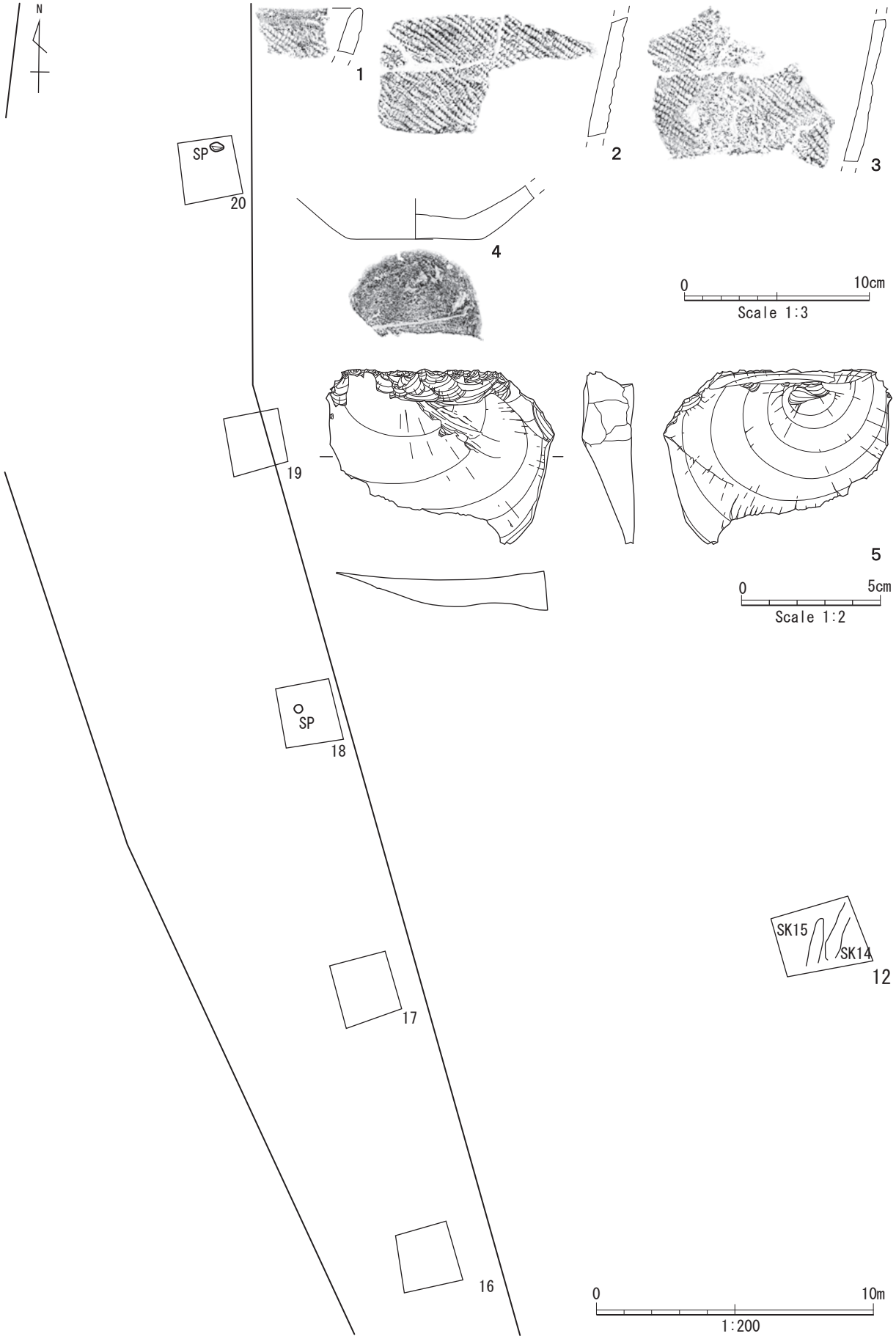


図113　検出遺構（12・18・20）と出土遺物

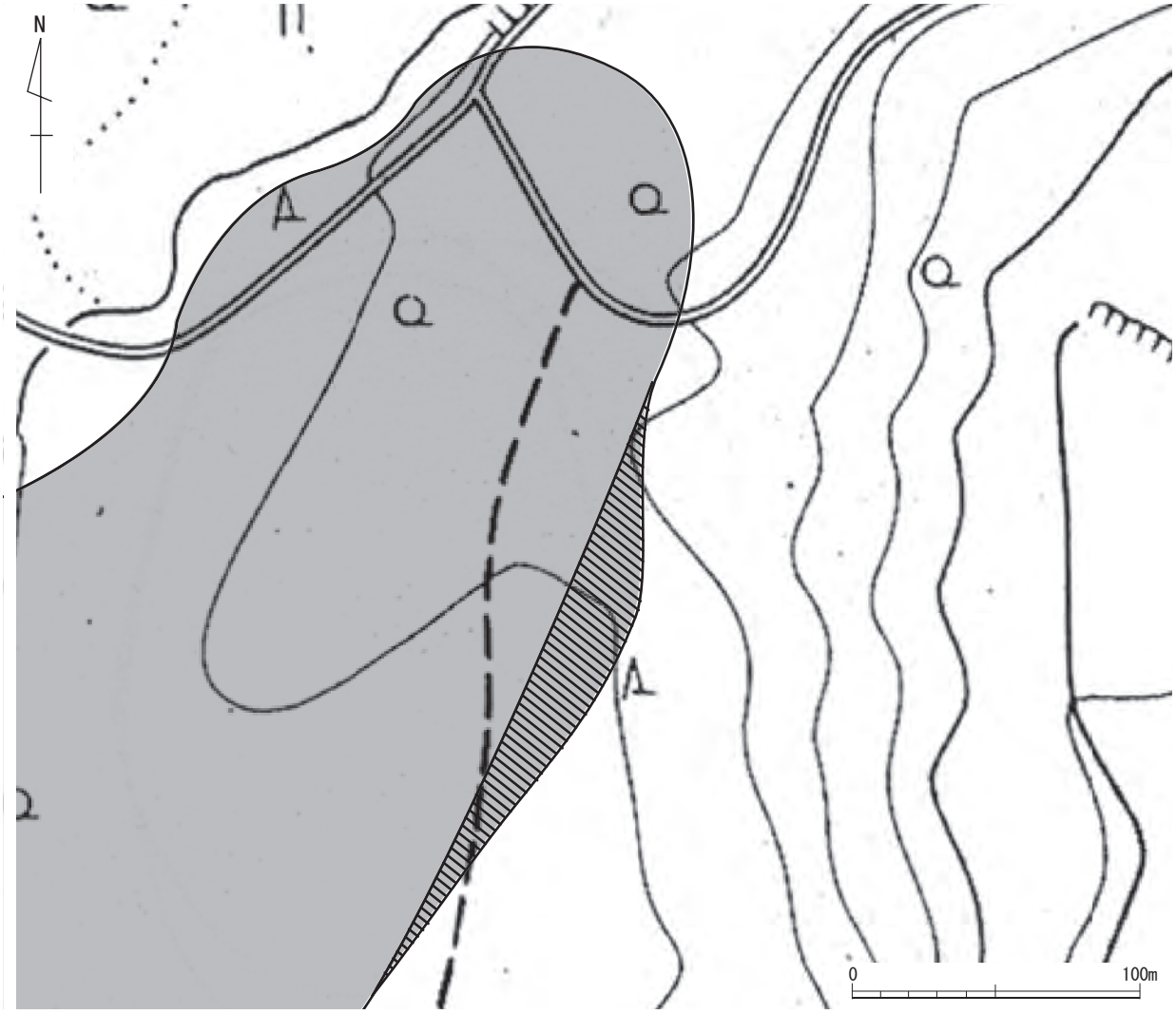


図114　調査結果図（1：2,500）

表29　種別遺構一覧

調査区遺構	落し穴	柱穴・柱穴様ピット	計
ＴＰ12	2		2
ＴＰ13		2	2
ＴＰ18		1	1
ＴＰ20		1	1
ＴＲ1	1		1
計	3	4	7

表30　出土遺物一覧

分類	P		S						合計
調査区	5	計	1 3	1 4	1 6	2	3	計	
ＴＰ17						1		1	1
ＴＲ１	1	1				1		1	2
表採	24	24	1	1	1	6	1	10	34
合計	25	25	1	1	1	8	1	12	37

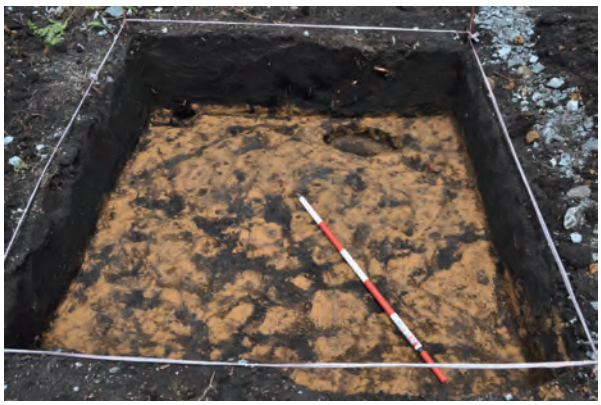
菅谷地遺跡遠景（北から）

作業状況（南から）

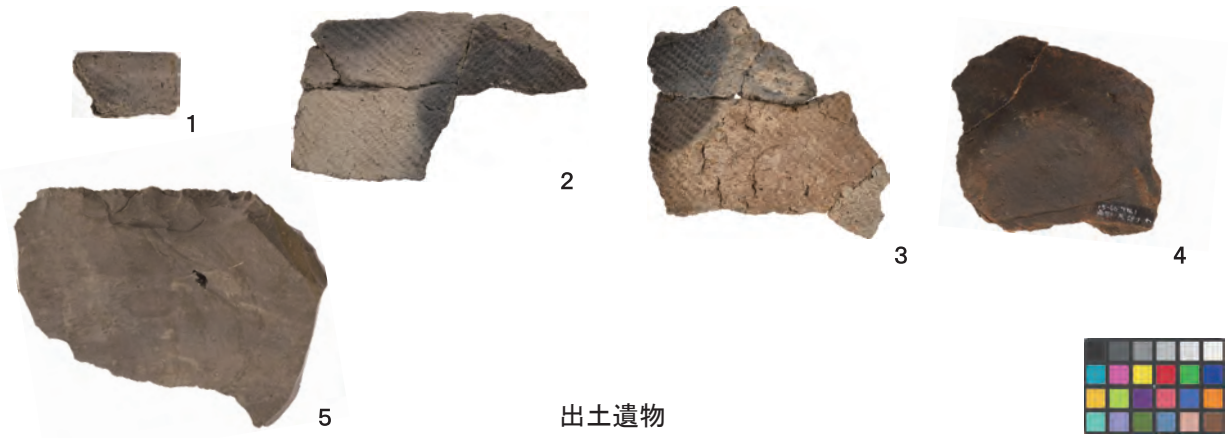
12遺構検出状況（南から）

Ｔ１検出遺構調査状況（北東から）

18遺構検出状況（南から）



20遺構検出状況（南西から）



出土遺物

図版 41　調査状況と出土遺物

３　みのり台遺跡隣接地（個人住宅建設工事）

⑴　遺跡の位置と周辺の環境

みのり台遺跡は、早口川が米代川と合流する地点付近の低位段丘（通称　みのり台）上に所在する。本遺跡の北西側には縄文中期末葉～後期の遺跡である丸山Ⅰ遺跡、丸山Ⅰ遺跡の南隣に縄文時代の遺跡である丸山Ⅱ遺跡、北側には縄文後期の遺跡である宮下遺跡、南西側には長坂塚の岱遺跡が所在する。

調査地の位置は、遺跡の南側の隣接地で、北緯 40 度 16 分２秒、東経 140 度 26 分０秒（世界測地系）である。標高は 62mほどである。

⑵　調査の内容

事業者の要望により、開発予定地外の北側隣接地に任意のトレンチを１本設定した。トレンチの掘削は全て人力で行い、埋蔵文化財の有無等について調査した。

調査地内の基本層序は、基盤をなす黄褐色粘土層上に腐植土層が堆積する単純なものである。以下に基本層序を示す。

Ⅰ層　表土および耕作土。
Ⅱ層　黒色を呈する腐植土層である。
Ⅲ層　黒褐色を呈する土層。Ⅱ層とⅣ層の漸移層である。
Ⅳ層　黄褐色を呈する粘土層。

調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。

⑶　まとめ

調査の結果、遺構・遺物は確認されなかったため、今回の本調査地が遺跡のエリアに入るとは考えがたい。

図 115　調査区と周辺の地形（１：2,500）

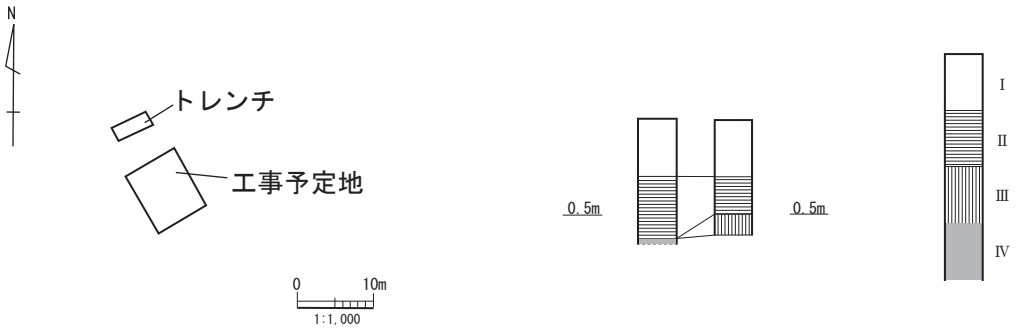


図 116　調査位置図

遺跡遠景

調査地近景

人力による精査

調査状況

図版 42　みのり台遺跡隣接地

引用・参考文献

上田秀夫　1982　「14～16 世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』２

小野正敏　1982　「15、16 世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』２

大橋康二　1989　『肥前陶磁』　ニューサイエンス社

九州近世陶磁学会　2000　『九州陶磁の編年』

五所川原市教育委員会　2003　『五所川原須恵器窯跡群』　五所川原市埋蔵文化財調査報告書第 25 集

新宿区内藤町遺跡調査会編　1992　『東京都新宿区　内藤町遺跡』　東京都建設局　新宿区内藤町遺跡調査会

鈴木　信　2012　「Ｖ遺物　２陶磁器・土器、土陶磁製品」『松前町　福山城下町遺跡』　(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第 290 集

藤澤良祐　1986　「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ｖ　瀬戸市歴史民俗資料館

藤澤良祐　1991　「古瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『瀬戸市史歴史民俗資料館研究紀要』Ｘ　瀬戸市歴史民俗資料館

付編　大館城跡の自然科学的分析

１　大館城跡堀跡３出土木製品樹種同定報告

（株）吉田生物研究所

(1)　試料

試料は大館市大館城跡堀跡３から出土した農具１点、服飾具１点、部材１点の合計３点である。

(2)　観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

(3)　結果

樹種同定結果（針葉樹１種、広葉樹１種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

１）ヒノキ科アスナロ属（*Thujopsis* sp.）

（遺物No.２，３）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で１分野に２～４個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

２）モクレン科モクレン属（*Magnolia* sp.）

（遺物No.１）

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～110μm）が単独ないし２～４個複合して多数分布する。軸方向柔組織は１～２層の幅で年輪界に配列する。柾目では道管は単穿孔と側壁に階段壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなる同性と平伏と直立細胞からなる異性がある。道管放射組織間壁孔は階段状である。板目では放射組織は１～３細胞列、高さ～700μmとなっている。モクレン属はホオノキ、コブシなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

林 昭三 「日本産木材顕微鏡写真集」 京都大学木質科学研究所（1991）

伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」 京都大学木質科学研究所（1999）

島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版（1988）

北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社（1979）

奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）

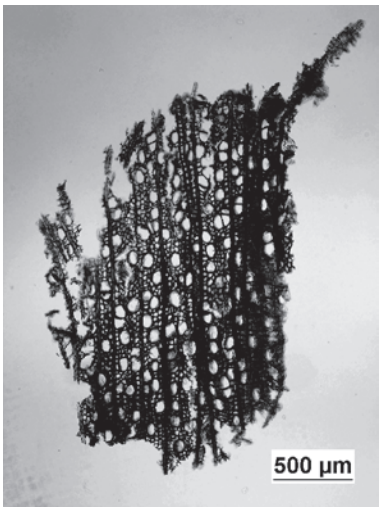
奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

◆使用顕微鏡◆

Nikon DS-Fi1

大館城跡堀跡３出土木製品樹種同定表

Ｎｏ．	品　名	樹　　種
1	下駄の歯	モクレン科モクレン属
2	部材	ヒノキ科アスナロ属
3	横槌	ヒノキ科アスナロ属

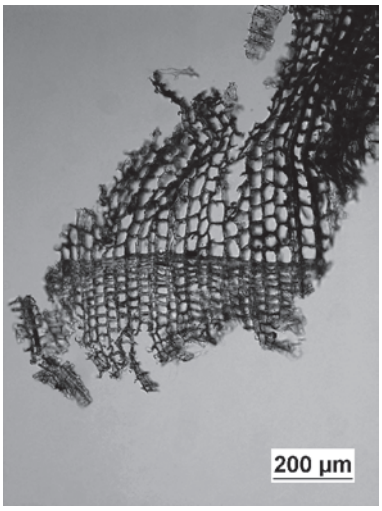


木口

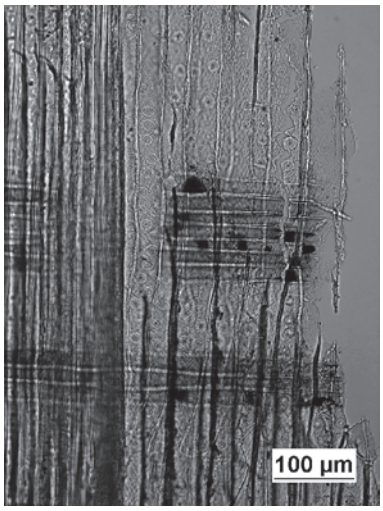
柾目

板目

No-1　　モクレン科モクレン属



木口

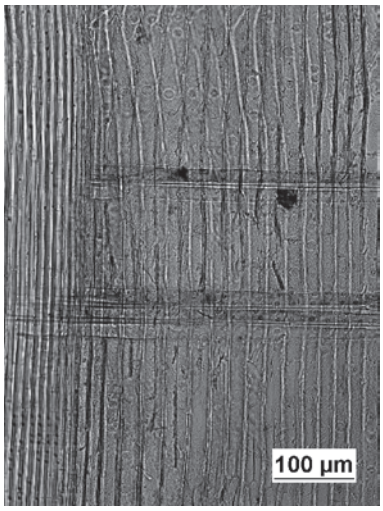


柾目

板目

No-2　　ヒノキ科アスナロ属

木口



柾目

板目

No-3　　ヒノキ科アスナロ属

報　告　書　抄　録

ふりがな	おおだてしないいせきしょうさいぶんぷちょうさほうこくしょ(5)
書　　名	大館市内遺跡詳細分布調査報告書(5)
副書名	
巻　　次	
シリーズ名	大館市文化財調査報告書
シリーズ番号	第15集
編著者名	嶋影壮憲・滝内　亨・馬庭和也
編集機関	大館市教育委員会歴史文化課
所在地	〒017-0012　秋田県大館市釈迦内字獅子ヶ森1番地　TEL 0186 - 43 - 7133　FAX 0186 - 48 - 2512
発行機関	大館市教育委員会
所在地	〒018-3595　秋田県大館市早口字上野43番地1　TEL 0186 - 43 - 7111　FAX 0186 - 54 - 6100
発行年月日	2019年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
さわぐち　いせきりんせつち 沢口Ⅱ遺跡隣接地	あきたけんおおだてしまがた 秋田県大館市曲田	05204	4 - 168	40° 13′ 12″	140° 37′ 48″	20140603 ～ 20140606	7	詳細分布調査
おおだてじょうあと 大館城跡①	あきたけんおおだてしあざなかじょう 秋田県大館市字中城		4 - 46	40° 16′ 18″	140° 33′ 53″	20141104 ～ 20141223 ・ 20150902 ～ 20150926 ・ 20161213 ～ 20161221 ・ 20170318 ～ 20170322 ・ 20171111 ～ 20171122	428	
かみかわぞいちく 上川沿地区	あきたけんおおだてしいけない、えつり、 秋田県大館市池内、餌釣、 やまだて、こだてばな 山館、小館花		—	40° 14′ 48″	140° 34′ 16″	20141106 ～ 20141203 ・ 20151117 ～ 20151128 ・ 20161117 ～ 20161130	304.75	
どびやまだてあと 土飛山館跡①	あきたけんおおだてしゆたかちょう 秋田県大館市豊町		4 - 45	40° 16′ 21″	140° 33′ 12″	20151001 ～ 20151128	71	
どびやまだてあと 土飛山館跡②	あきたけんおおだてしゆたかちょう 秋田県大館市豊町		4 - 45	40° 16′ 22″	140° 33′ 11″	20151014 ～ 20151114	26	
おおだてじょうあと 大館城跡②	あきたけんおおだてしあざさんのまる 秋田県大館市字三ノ丸		4 - 46	40° 16′ 24″	140° 33′ 44″	20151201 ～ 20151208	32	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
はやしのうえいせきりんせつち 林ノ上遺跡隣接地	あきたけんおおだてしおおしない 秋田県大館市大子内	05204	4 - 106	40° 14′ 11″	140° 30′ 7″	20160720 ～ 20160723	8	詳細分布調査
かわぐちちく 川口地区	あきたけんおおだてしかわぐち 秋田県大館市川口		—	40° 16′ 33″	140° 28′ 30″	20161112 ～ 20161117	21	
はなおかまちちく 花岡町地区	あきたけんおおだてしはなおかまち 秋田県大館市花岡町		—	40° 20′ 22″	140° 33′ 13″	20170613 ～ 20170614	10	
おおだてじょうあと 大館城跡③	あきたけんおおだてしあざなかじょう 秋田県大館市字中城		4 - 46	40° 16′ 16″	140° 34′ 2″	20170627 ～ 20170628	22.4	
おおだてのいせき 大館野遺跡	あきたけんおおだてししらさわ 秋田県大館市白沢		4 - 5	40° 20′ 13″	140° 35′ 1″	20170822 ～ 20170826	40	
しゃかないふるだてあと 釈迦内古館跡	あきたけんおおだてししゃかない 秋田県大館市釈迦内		4 - 25	40° 18′ 13″	140° 33′ 39″	20170927 ～ 20170928	28	
ゆきさわちく 雪沢地区	あきたけんおおだてしゆきさわ 秋田県大館市雪沢		—	40° 17′ 53″	140° 39′ 41″	20171017 ～ 20171018	10	
おおだてじょうあと 大館城跡④	あきたけんおおだてしあざなかじょう 秋田県大館市字中城		4 - 46	40° 16′ 20″	140° 33′ 58″	20171125 ～ 20171130 ・ 20181221 ～ 20190110	46	
しゃかないだてあと 釈迦内館跡	あきたけんおおだてししゃかない 秋田県大館市釈迦内		4 - 26	40° 18′ 5″	140° 33′ 49″	20180416 ～ 20180427	252	
おおだてじょうあと 大館城跡⑤	あきたけんおおだてしあざなかじょう 秋田県大館市字中城		4 - 46	40° 16′ 19″	140° 34′ 1″	20180605 ～ 20180606	10	
はなおかじょうあと・かみやまいせき 花岡城跡・神山遺跡	あきたけんおおだてしはなおかまち 秋田県大館市花岡町		4 - 21	40° 19′ 12″	140° 33′ 10″	20180711	10	
かねざかいせき 金坂遺跡	あきたけんおおだてしあざかねざか 秋田県大館市字金坂		4 - 47	40° 16′ 25″	140° 34′ 8″	20180712 ～ 20180714	10	
おおだてじょうあと 大館城跡⑥	あきたけんおおだてしあざけいじょう 秋田県大館市字桂城		4 - 46	40° 16′ 19″	140° 34′ 1″	20181030 ～ 20181103	58	
おうぎたみちうえいせきりんせつち 扇田道上遺跡隣接地	あきたけんおおだてしひがしだい　ちょうめ 秋田県大館市東台３丁目		4 - 140	40° 15′ 50″	140° 34′ 33″	20181114 ～ 20181115	10	
こたてちょういせき 小館町遺跡	あきたけんおおだてしこたてちょう 秋田県大館市小館町		4 - 141	40° 15′ 40″	140° 33′ 15″	20181124	8	
ながおかじょうあと 長岡城跡	あきたけんおおだてしひないまちおうぎた 秋田県大館市比内町扇田		12 - 17	40° 13′ 12″	140° 35′ 1″	20140611 ～ 20140718	109	
ひないまちとっこちく 比内町独鈷地区	あきたけんおおだてしひないまちとっこ 秋田県大館市比内町独鈷		—	40° 9′ 38″	140° 37′ 58″	20150804 ～ 20150806 ・ 20151208 ～ 20151209	20	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コ　ー　ド 市町村	遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
しんだて　いせき 真館Ⅱ・Ⅲ遺跡	あきたけんおおだてしひないまちにいだて 秋田県大館市比内町新館	05204	12 - 52 12 - 53	40° 12′ 55″	140° 35′ 12″	20160924 ～ 20161007 ・ 20161021 ～ 20161119	414	詳細分布調査
かたかいいせきりんせつち 片貝遺跡隣接地	あきたけんおおだてしひないまちかたかい 秋田県大館市比内町片貝		12 - 27	40° 13′ 19″	140° 33′ 42″	20161130 ～ 20161203	10	
おおたいいせきりんせつち 大岱遺跡隣接地	あきたけんおおだてしひないまちおうぎた 秋田県大館市比内町扇田		12 - 14	40° 13′ 5″	140° 35′ 33″	20181121 ～ 20181129	70.2	
おおかわめもとわたりいせきりんせつち 大川目元渡遺跡隣接地	あきたけんおおだてしいわせ 秋田県大館市岩瀬		15 - 67	40° 23′ 29″	140° 26′ 39″	20141007 ～ 20141011	79	
すがやちいせき 菅谷地遺跡	あきたけんおおだてしはやぐち 秋田県大館市早口		15 - 66	40° 20′ 42″	140° 24′ 12″	20160401 ～ 20160402 ・ 20160527 ～ 20160608 ・ 20170714 ～ 20170725	297	
みのりだいいせきりんせつち みのり台遺跡隣接地	あきたけんおおだてしながさか 秋田県大館市長坂		15 - 63	40° 16′ 2″	140° 26′ 0″	20171205 ～ 20171206	10	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大館城跡	城跡	江戸	土坑、溝跡、堀跡、柱穴・柱穴様ピット、石敷遺構	陶磁器、土器、鉄製品、銭貨、石製品、木製品	堀跡を検出
土飛山館跡	集落跡、館跡	平安・中世	竪穴建物跡、溝跡、堀跡、土塁	須恵器、土師器、珠洲系陶器、鉄滓	
大館野遺跡	集落跡	平安		須恵器	
釈迦内古館跡	館跡	平安・中世		土師器	
釈迦内館跡	館跡	平安・中世	堀跡	土師器、陶磁器	
金坂遺跡	集落跡	平安・中世	柱穴様ピット	磁器	
小館町遺跡	散布地	縄文	柱穴様ピット	縄文土器	
長岡城跡	集落跡・城跡	縄文・続縄文・中世	溝跡	縄文土器、続縄文土器、陶磁器、石器	
真館Ⅱ遺跡	散布地・集落跡	縄文・平安	竪穴住居跡、柱穴	縄文土器、土師器、石製品	
真館Ⅲ遺跡	狩猟場	縄文	落し穴、柱穴		
菅谷地遺跡	集落跡	縄文	落し穴、柱穴	縄文土器、石器	

要　約	平成26～30年度は、29の開発事業予定地内の詳細分布調査を実施した。その結果、大館城跡のうち５地点、土飛山館跡２地点、釈迦内館跡、真館Ⅱ・Ⅲ遺跡については、本調査が必要、大館城跡のうち１地点、大館野遺跡、釈迦内古館跡、花岡城跡・神山遺跡、金坂遺跡、小館町遺跡、長岡城跡、菅谷地遺跡については、工事立会が必要と判断し、開発事業との調整を図った。

大館市文化財調査報告書第15集

大館市内遺跡詳細分布調査報告書（5）

発 行 日　平成31年3月31日
編　　集　大館市教育委員会歴史文化課
　　大館市釈迦内字獅子ヶ森１番地
発　　行　大館市教育委員会
　　大館市早口字上野43番地１
印　　刷　株式会社大館印刷
　　大館市馬喰町35番地